徳島の剣道

別冊

徳島の剣道史〔1〕

《巻頭言》

「徳島の剣道史〔1〕」に思いを込めて …… 三木　毅…… 1

《徳島の剣道の歩み》

歴代範士の記録……三木　毅…… 3

木頭剣道のはじまり……三木　毅…… 8

名田の剣豪 笹田市之丞慧典と田村楚一範士 ……三木　毅……14

「剣道の中興は落羽の森より」徳農剣道部での五十年 …… 伊賀　雅人……19

《県内支部の歩み》

阿南支部……別宮　憲治……24

名西支部……別宮　憲治……40

徳島県剣道連盟

高島永吉 範士

戦後、全日本剣道連盟より徳島県初の範士（昭和33年５月）が授与された。

その詳細については『徳島の剣道』第37号に「わが祖父 範士八段 高島永吉を偲ぶ」として、孫にあたる高島稔之氏による寄稿がなされている。

巻頭言

『徳島の剣道史〔1〕』に思いを込めて

『徳島の剣道史』編集委員長　三木　毅

『徳島の剣道史』を編纂しようとの発想は、亡き坂本裕二先生と堀江幸夫先生をはじめとする諸先生方の強い思いを込めてのものであった。

顧みると私が徳島の剣道史編纂計画を耳にしたのは、平成十五年（二〇〇三年）四月のことであった。私は奇しくも、徳島県剣道連盟の理事長に推挙され就任することになった。私は過去において、徳島県警において剣道特錬員として籍を置き、剣道に熱中した時期があったが、除籍後は刑事警察官として警察人生を過ごし、平成十五年三月に退職した。この間に警察剣道部会の部会長という役職を頂いたことがありましたが、徳島県剣道連盟の全ての姿を知ることがなく時を過ごしていた。

理事長役を頂き、剣道界のあらゆる部門や諸先生方の役割そして気配りなどの万般を知ろうと懸命に取り組んだ。その中の一つに「徳島の剣道史編纂」というとても壮大な取り組みが存在していた。その内容を知ることとなった経緯とは、　私が少年時代から剣道でお世話になっていた市場町八幡の坂本裕二先生のお話を聞くことからはじまった。

坂本先生は私に「三木君よ、一度家に寄ってくれるか」と電話があった。当時私は、第二の就職先が脇町であったことから通勤途上に先生宅に立寄ると「こんな身近な人が理事長になって好都合じゃ。これから剣道史の編纂を手伝って欲しい。目次案はこれじゃ。」とのことであった。その後、再三の出入りが始まったのである。

内容を聞くうちに壮大な計画であり、相当の覚悟と実働がなければ成しえないとの印象であった。この歴史探訪の大きな柱は二つあった。一つ目は、藩政時代の徳島剣道、二つ目は明治以降の徳島剣道であり、藩政時代の剣道は、坂本裕二先生が相当深く研究されていた。明治以降の剣道は、堀江幸夫先生が担当し、相当の資料収集がされ、整理中であった。

私なりに全体像を想像してみると、出来上がりの書物は、少なくとも一五〇〇頁になろうという代物であった。しかもこれをどのように取り組む陣容があるのか又、どれほどの予算があるのか、そして仮に出来たとしてこの書籍を同販売するのかなどの課題が

あった。この課題に取り組む役目は理事長ではないのかと自問した。物事の進展には、人・物・金は必修条件であり、人とは歴史探訪の従事者の確定・物とは歴史資料収集・金とは製作諸費用である。

諸先生に相談を重ね、特に製作諸費用には相当額の予算編成をすべきことを申し上げた。諸先生方から賛同が得られ、次期総会に経費上程することとなり、これが可決された。この予算案の中で特に重要なのは、完成した徳島の剣道史の価格の半額を剣道連盟が補助することができるというものであった。

おぼろげにも形ができ、資料収集作業を開始することができた。ところが剣道歴史の各般の探訪を進めるごとに存在する資料の少ないことに遭遇し、前進できないという壁に突き当たった。そのために当初作成された目次案に沿ってはとても解明できないこととなり、時間の経過の割には収集資料が稀薄のままであった。

そこで考えられたことは、既存の「徳島の剣道」誌上に解明されたものから掲載するという手法であった。この方針変更により編集に携わる者としては、取り組みに力が入ることとなった。この度、「徳島の剣道」編集長の木原先生からのご提案を受け、「徳島の剣道」の別冊として『徳島の剣道史（一）』を編集しようとの結論となり、令和五年度分から発刊することとなったのである。

そこで改めて剣士諸氏にお願いを申し上げます。先ず、剣道史の作成意義であります。剣道史に関することを、文字にして後世に残しておくことの重要さを感じておりますことから、多くの剣士諸氏自らが剣道史に関する史実を記述していただきたいのであります。そしてまた剣道史関連情報を寄せていただきたいのであります。こうすることによって、『徳島の剣道史』の深さと幅が広がるものと確信するからであります。

多くの剣士諸氏の知恵を結集して、『徳島の剣道史』が充実できることを心から願っております。

徳島の剣道の歩み

歴代範士の記録

徳島の剣道史　編集委員　三　木　　毅

一、はじめに

明治以降の剣道・居合の歴史研究は、堀江幸夫先生が担っていた。先生が晩年、私に対し資料の引継ぎがあった。その後、后子奥様から多量の資料提供も受けた。これを「堀江蔵書」と名付けた。堀江蔵書は膨大なものであった。資料に目を通し、概略を把握した。そこで整理の一端として、明治以降の剣道・居合の範士の資料整理作業を開始した。

最初の取りつきは「範士という文言」がどのような経緯で誕生したかであった。文献をあさったが明らかにすることができなかった。剣道界で登場する「範士」は、全日本武徳会である。明治二十八年四月に発足した武徳会は、明治三十五年に「武術家優遇例」を制定し、「範士」と「教士」の二つの称号を規定した。「範士受有者」は「終身二十五円以内の年金を贈与」とされた。（令和四年の換算では年十万余円か）授与内容の記述によると「大日本武徳会は剣道・柔道・弓道・居合術・杖術・薙刀術・槍術・銃剣術などの各種武道家に範士号を授与した」と記されている。

先ず、全剣連に照会すれば、一気に解決するであろうとの期待で照会したところ、整理されていないことが判明した。よって県内の文献を点検し、堀江蔵書を読み進めることとなった。ありがたくも堀江蔵書には名簿録があり、範士というメモ書きが存在した。堀江メモに加えて、各種の資料に「〇〇範士は」という記述があれば抜粋して、新たなメモを作成した。合計三十名の範士先生が明らかとなった。

範士の授与には、二つの道がある。一つは「現役授与」で、二つには没後の「追授授与」である。「没後授与」制度は平成十二年（西暦二〇〇〇年）の「称号・段位審査規則」の改正で廃止となった。

二、授与された先生方（敬称略）

《現役授与》

秋山多吉郎	大正三・五・一七受
山根　正雄	大正十一・九・十七受
近江佐久郎	大正十四・七・七受
堀口朝次郎	不明
高島　永吉	昭和三三・五・九受
須見　善富	昭和四〇・三・一受
近江　　勇	昭和四〇・五・九受
石井　隆介	昭和四七・五・八受

竹原　常雄　昭和五五・五・八受
堀江　幸夫　昭和五七・五・八受
三木　只雄　昭和五九・五・八受
田村　楚一　昭和六〇・一・二一受
清原　　栄　昭和六二・五・八受
石井克太郎　平成　四・五・八受
勝浦　　守　平成　七・五・八受
大澤　譲二　平成　七・五・八受
平尾　勝美　平成　九・五・四受
原田　　勝　平成二〇・五・三受
須見　善富　昭和三七・五・十　八段昇段　昭和四〇・五・五　居合範士受称

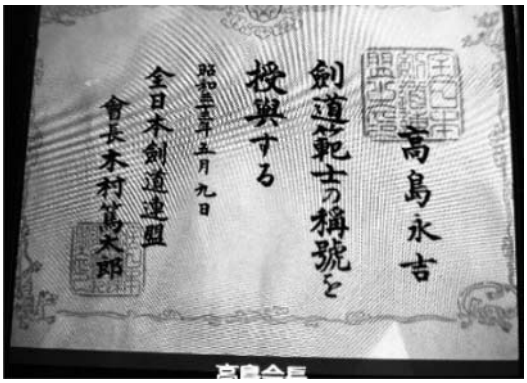
《没後授与（追授）》

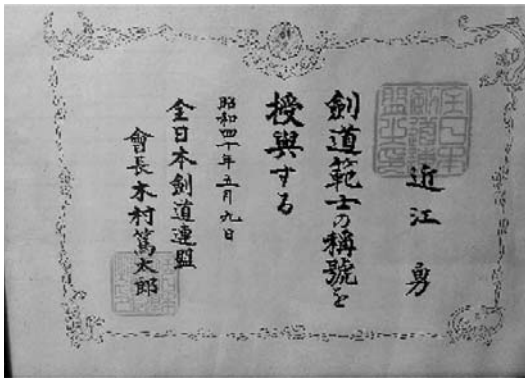
吉本　彦吉　昭和二一・七・十受
石丸　米蔵　昭和三四・五・二八受
浅井　真一　昭和五一・五・八受
山本　忠蔵　昭和五三・五・八受
山家　雪蔵　昭和五五・五・二受
柴田　稔夫　昭和五八・十一・五受
滝下　　勝　昭和五九・三・十四受
下村　富夫　昭和六二・二・二受
林　　裕一　昭和六二・六・二六受
井上　健二　平成　元・十・十八受
松本　一城　平成二・三・十九受
伊原　秀文　平成　三・三・十九受

（滝下　勝範士は、剣道、居合道の範士を同時授称した。
下村富夫範士は、剣道、居合道の範士を同時受称した。）

三、範士証書

須見善富
居合道範士の稱號を
授與する
全日本剣道連盟
會長 木村篤太郎


高島永吉
剣道範士の稱號を
授與する
昭和五十年五月九日
全日本剣道連盟
會長 木村篤太郎


近江 勇
剣道範士の稱號を
授與する
昭和四十年五月九日
全日本剣道連盟
會長 木村篤太郎

須見善富
剣道範士の稱號を
授與する
全日本剣道連盟
會長 木村篤太郎

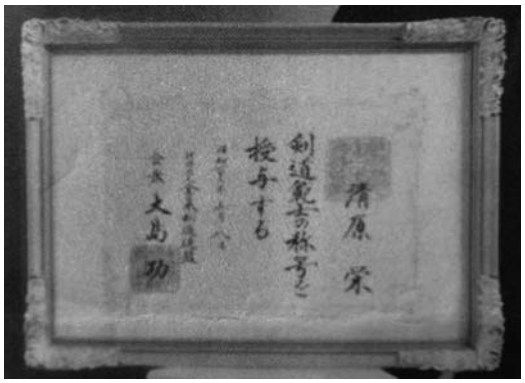
木 只雄
剣道範士の称号を
授与する
全日本剣道連盟
会長

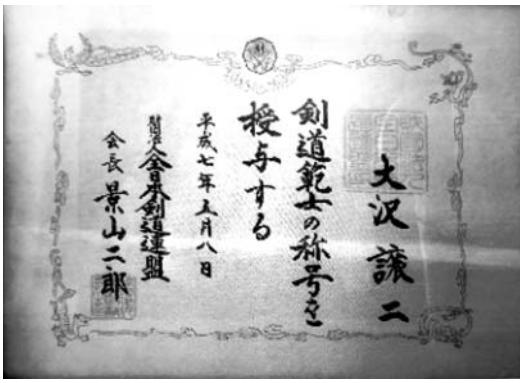
剣道範士の称号を
授与する
全日本剣道連盟
会長 木村篤太郎

村 楚一
剣道範士の称号を
授与する
全日本剣道連盟
会長 大島 功

堀江 幸次
剣道範士の称号を
授与する
全日本剣道連盟
会長 河合

勝浦 守
剣道範士の称号を
授与する
平成七年五月八日
財団法人全日本剣道連盟
会長 景山二郎


清原 栄
剣道範士の称号を
授与する
会長 大島 功


大沢 譲二
剣道範士の称号を
授与する
平成七年五月八日
財団法人全日本剣道連盟
会長 景山二郎

石井克太郎
剣道範士の称号を
授与する
平成四年五月八日
財団法人全日本剣道連盟
会長 大島 功

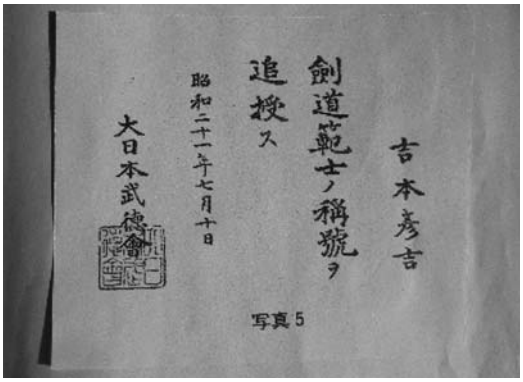
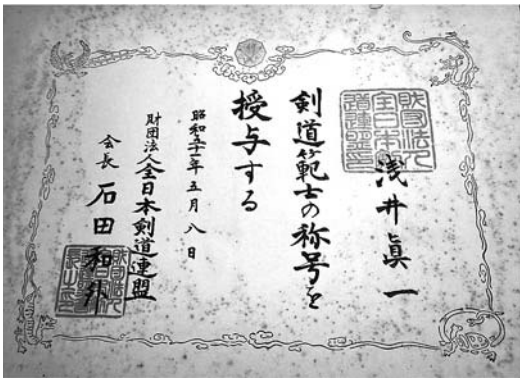

吉本孝吉
剣道範士ノ稱號ヲ
追授ス
昭和二十一年七月十日
大日本武徳會

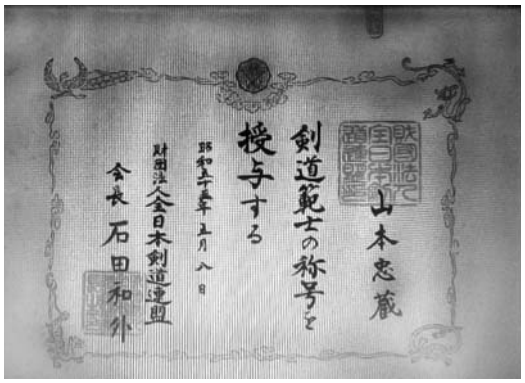
写真5

平尾勝美
居合道範士の称号を
授与する
財団法人全日本剣道連盟
会長 景山二郎


浅井真一
剣道範士の称号を
授与する
昭和五十年五月八日
財団法人全日本剣道連盟
会長 石田和外

原田 勝
居合道範士の称号
を贈る
平成二年五月三日
財団法人全日本剣道連盟
会長 武安義光

滝下 勝
剣道範士の称号を
授与する
会長 庄子宗光


山本忠蔵
剣道範士の称号を
授与する
会長 石田和外

滝下 勝
居合道範士の称号を
授与する
会長 庄子宗光

森田裕夫
剣道範士の称号を
授与する
会長 庄子宗光

林 裕一
剣道範士の称号を
授与する
会長 大島 功

下村富夫
居合道範士の称号を
授与する
会長 大島 功

樋本一城
剣道範士の称号を
授与する
会長 大島 功

下村富夫
剣道範士の称号を
授与する
会長 大島 功

木頭剣道のはじまり

徳島の剣道史　編集委員　三　木　　毅

一、はじめに

木頭剣道と言えば、古き時代から名剣士が誕生している。きれいな立ち姿、よく練磨されている、勝負強さがある、など理想的な剣士が存在している。木頭の剣士は自ら「木頭は阿波のチベット」と言い放ち平然としておられる姿が印象的である。県都徳島市から車で三～四時間を要する山間地で西方の隣接は高知県である。今こそ車社会の時代であるが、明治時代の交通不便な社会環境の中で木頭剣道の始まりや修錬の様子はどうであったかと思案してみた。

木頭で修行し居合道範士八段となった原田勝先生に伺うと、書籍二冊の提示をいただいた。二冊共に大澤善二郎先生が書き表したもので、一つは昭和三十八年三月発行の「西岡信太伝」であり、一つは昭和四十五年五月発行の「九州一周　武者修行記」である。

また、これこそ貴重な本として存在するのが、大澤善次郎先生の教え子である「松本英雄」と「西島竹一」共書の「剣道と教育の生涯　大澤善次郎先生」という書籍である。木頭剣道の歴史を知る上でこの三書は、誠に貴重そのものである。この貴重な資料を、是非総括しておくべきとの結論となったのである。敬称を略して述べることとしたい。

二、木頭の交通事情

藩政時代から明治時期に至る木頭への交通手段を想うに、それは「徒歩」であると結論できる。阿波のチベットと称される深山の木頭で、剣道がどのように伝承されてきたかに先立って、どのような交通事情であったかを明らかにしたいという強い思いがあった。藩政時代から現代までの政治の本拠地は、徳島市である。徳島市を起点にすると、木頭の中心地と言われる、出原（いずはら）までは、約九十キロの地点になるのである。古書によると、明治期までの林道とは、木馬道として敷設された三尺幅（約九十センチ）の粗末なものであったとされている。

「西岡信太伝」には、徳島市佐古在住の「佐古五郎」こと「森十五三利」なる老剣士を師と仰ぎ、また、明治三十五年以降昭和十四年までの毎年、武徳会から審判員の派遣を受けて「端伝寺」（たんぜんじ）境内で剣道大会が開催されていたとある。

徒歩の時代にこのような剣士の往来が記されている。このような往来の実態を知りたく探訪を進めた。その結果、二例を示すことができるようになった。

その一つは「西岡信太伝」による。同人は十六歳にして実父が他界したことで一家の生計のために多岐な職種に従事したという。地域内で重病人が出ると「雲助」という役に雇われ、「籠かき」として「前さし」と「後さし」の二人一組の三組で、徳島市の若

林病院に二日をかけて搬送したという。また、極最近のこととして実績が残されているのが「チャリティーウオーク隊」のことである。それは毎年のこととして社会に定着している「愛は地球を救う」企画である。平成九年八月二十四日と二十五日にかけ、「木頭中学生六十三人」が「徒歩で四国放送局玄関まで行き募金を手渡したことである。この企画は、事前に克明な計画が練られており、それによると、昼食時は一時間の休息をとるが、途中はトイレ休憩約一〇分とし、一日約十一時間の歩行であると記録されている。

大人も中学生も徳島市まで徒歩は、二日がかりの行程であることが実感として伝わってくる。木頭の住人はこのような環境下で、剣道の修練に情熱をそそぎ、現在に剣道が伝承されていることに敬服の念をもっている。

二、大澤善二郎の貴重な発想

大澤善二郎は木頭村出身で生涯を剣の道を貫き、一方、教職を務め、後年は木頭村教育委員の経歴者である。剣道範士八段大澤孝彰（譲二）の実父である。

善二郎は、同郷の西岡信太が、惜しみなく社会へ献身する人生観とその一方で優れた剣道観の持ち主であることに感銘し、丹念に記述した「西岡信太伝」を表した。また、九州武者修行記は木頭十剣士の体験記であり、交剣知愛の意味するところを記述されたものである。

また、「剣道と教育の生涯　大澤善二郎先生」は生前の手記や録音音声の起稿、教え子の寄稿などにより、善二郎の生涯を表した著書である。この三書は是非とも後世に残すべきものとして記述されたことを物語っている。

今となり、木頭の過去を追うものとして、これだけの資料を残した発想は、他に類のない貴重な歴史書である。

三、「西岡信太伝」の概要

西岡家が木頭に安住したのは、江戸時代中期の享保十一年（一七二六年）のことであるという。史実でおなじみの大岡越前守が江戸町奉行に就任した時代である。紀州の観音霊場「福泉院」の浄祐坊から山伏の印可を受けた二十六人衆のうちの一人である布教師が木頭に落ち着いたのが元祖とされている。

剣道界では名声ある木頭の西岡三兄弟すなわち西山勝喜・西岡金若・福井軍二の実父が西岡信太である。西岡信太は善二郎より十歳年上の明治二十五年八月二十四日生まれである。

西岡信太は父・西岡喜太郎の長男として生まれた。十六歳で父・喜太郎が他界したため、少年ながら戸主たる役目を果たすべく、懸命に働き家計を支えた。その傍ら剣道修行を志し、七十歳を超えた剣士、俗称「佐古五郎」こと「森十五三利」（読み方不明）から指導を受けていた。

二十歳（明治四十五年）で結婚し、子供は男七人、女二人の九人の子宝であった。信太夫婦は多岐な仕事を熟し、懸命に働き九

人の子供を養育した。次男は二十八歳で戦死、四男は二歳で病死し失ったが、男三人は剣道修行を志した。

信太は剣道錬士五段の剣士であり、西山勝喜、西岡金若、福井軍二の三人は教士七段の剣士となった。

信太は、社会貢献として、神社、仏閣の改築、修繕、学校建設、用水工事などの経費を寄付したのを始め、交友者への材木寄付や資金援助など地域の振興発展に大きく寄与されている。

中でも、木頭に唯一の映画館を建設し、「木頭会館」と命名し、映画、浄瑠璃、民芸などの振興があり、映画館を地域の保育所として開放し、また剣道修錬場として提供した。剣道場として開放し、木頭剣道の普及発展に寄与した功績により、昭和三十一年に当時徳島県剣道連盟会長であった徳島県知事・原菊太郎から表彰状が授与されている。

四、　木頭剣道のはじまり前夜

西岡信太伝によると、信太が十七歳の時、すなわち明治四十二年の時、剣道を志し、七十歳を超えた俗称「佐古五郎」こと「森十五三利」なる剣士を師と仰ぎ剣道を修錬したとある。この佐古五郎剣士は徳島市在住と推察され、時々木頭に来て剣道を指南していたと推察できる。

信太はこの佐古五郎剣士を自宅に雇い入れ、剣道の指導を受けたと記されている。この頃信太は母親から「着物が大変汚れて破れているので絣（かすり）を一反買ってやる」と言われたが、その金で剣道具を買いたいと懇願して、大阪の武道具店で七円五十銭（現在価格として六千倍すると四万五千円）で一式購入した。その後、他の青年会員と共に和無田小学校校長・三瀬熊太郎や山下金十郎からも剣道の指導を受けたという。一方、大澤善二郎著による明治期の剣道について次の記述がある。

我が木頭村は那賀川の最上流で盆地を形づくったところである。大東亜戦争までは自給自足の平和境であった。歴史を調べれば興味深いが、文献や遺物がなく、いつ頃住民が住み着いたか未知なくらいである。剣道の始まりなどについてもわかるべくもない。

百歳前後の人の青少年時代すなわち明治初年頃のことを聞くと「皆相当やった。武勇談がある。」という。また八十歳前後の老人の青年時代すなわち明治の終わりから大正時代では、「青年会には義務ように入会すると剣道をせんならんようになった。会の事業として杉林の下刈り、苗木の運搬などで収入を得、これで防具、竹刀を求めるなど努力した。各部落ごとにお宮の舞台、神社や阿弥陀堂の庭、或いは学校の教室を借り、ランプや焚火の明かりで稽古した。

明治三十五年以降昭和十四年頃までの四十年間、毎年一回出原の端伝寺（たんぜんじ）の庭でネハン行事として、武徳会から審判員の派遣を得て沢山の商品をかけ剣道大会を続けた。したがって、人口の割からすると現在より剣道人口は多かった。

五、木頭の剣道場

木頭の剣道場は、記録上は二つ挙げることが出来る。第一は大澤善二が昭和十五年に自費建設した「大和塾」（たいわ塾）剣道場である。

第二は西岡信太が昭和二十五年に建設した娯楽施設「木頭会館」を昭和二十七年五月から剣道に使用できるようになった剣道場である。

大澤善二郎は北川小学校校長の傍ら剣道に情熱を燃やし大和塾剣道場をもち、そこに剣道愛好家が集っていた。昭和二十年十月、善二郎四十二歳のとき、連合軍総司令部から公職追放され教職を去り、しかも同時に自宅にあった剣道場「大和塾」が取り壊しとなった。

善二郎は、公職追放が大きなショックとなり、自宅から約三百メートルの山中に、小屋掛け程度の家を建て、三年を過ごした後、約十キロメートル離れた南川原権田（現在の南川キャンプ場）の家屋を購入して自給自足の生活を始めた。この場所は、自宅から歩いて約半日かかる、人里離れた一家屋であった。それでも剣道具は持参していたという。

善二郎の現況を耳にした、吉本彦吉の弟子相生町の川野美和太が剣道防具持参で善二郎を訪ね、川原を整地して二人で稽古した。

川野美和太はその帰路途中に剣士松本英雄に会い、善二郎の現況を報告した。松本英雄は、以前大和塾で剣道を修錬した同志と相談し、後刻雄西義春と共に善二郎を訪ね、嫌がる善二郎を強引にも説得して実家に連れ戻したという。足掛け六年目に帰宅したのである。

昭和二十七年五月のこと西岡信太が六十四歳の時、自己が運営する映画館「木頭会館」を剣道場に開放したことで剣道修錬が開始された。

昭和三十一年を迎えた時、善二郎（五十三歳）の許に地元有志が集い、土地と建築材の提供、人手作業の提供などの発案がもたらされ、本格的な道場を建設することとなった。建物は控室・押入れ・風呂・炊事場・便所などを附置した専用道場であった。建物は「大和錬心館」と命名された。

大和錬心館は地元の剣道愛好家が集い盛況であり、徳島大学医学生が合宿することもあった。また、出張審査会場や講習会場として活用されるようにもなった。こうして、木頭地区の剣道が盛況を極めるための地域の拠点として成長したと言える。

大和錬心館で修錬され著名な剣士としては、大澤善二郎のご子息・大澤孝彰が剣道範士八段、そして居合道範士八段・原田勝が存在する。また西岡信太のご子息で、西山勝喜・西岡金若・福井軍二が共に剣道教士七段を取得されている。

六、大和錬心館の移転

大和錬心館は、昭和四十一年に木頭村役場建設のため現在地に移転した。移築に伴って道場内の改築が成された。

令和四年現在、多くの剣士が修練し活用されている。

指導者

昭和四六年まで・・・大澤善二郎

昭和四六年から・・・原田　勝

昭和五九年から・・・岡田　豊

平成二〇年から・・・小川大造　現在に至る

誕生した高段者

八段　大澤譲二　原田　勝　吉田　茂生

七段　佐々木和人　臼木　崇　曽根　徳治

吉田博文　富田　圭介　林　洋行

岩原靖人　富永ますみ

七、剣道への地元熱

木頭剣道の発展概略を述べてきたが、連綿と引き継がれたのは、旺盛な地元熱が支えになっている。善二郎書にあるように、人口の割りにしては剣道人口が多かったこと。世話人が、防具や設備等のために寄付を依頼するとかなり希望がかなったという。それは自然と剣道への地元熱が盛り上がっている証であると思われる。

ア、端傳寺（たんでんじ）境内での「ネハン剣道」

ネハン剣道の歴史は相当古いと推定できる。端傳寺の境内の庭での剣道であった。善二郎が誕生する一年前の明治三十五年に第一回大会が開始され、当日には、武徳会から審判員の派遣を得て、沢山の賞品を準備して行われた。

この剣道大会は毎年一回の行事で、昭和十四年まで継続されている。数えてみると、三十九回となる。

イ、阿土大会

原田勝範士から貴重な資料をいただいた。

西岡信太の三男は西山勝喜である。海部町大井の自宅に剣道場を持つ、情熱剣道家である。

林業の仕事で四国各地を回っている中で、高知県物部村の剣道教士七段・坂本誠士と出会った。双方が剣道稽古仲間となり、物部村と木頭村の交流稽古を計画した。昭和四十六年のことであった。四十六年七月のこと、木頭村民体育館で対戦会を行った。双方約五十名が小学生から成人までが対戦を進める交流会となった。

小学生二十九名は、一本も取れなく惨敗であった。これを縁として、県境の山の名を冠して「石立山の合戦」として勝ち抜き戦など通じて、那賀川流域と物部川流域の交流が活発となり継続された。

交流会は、阿土少年錬成大会との名称で、第一回大会は昭和四十八年八月二十五日に木頭村民体育館で開催された。令和四年十二月大会は五十年目となった。

八、徳島市内での第二錬心館の発足

大澤善二郎は、昭和三十六年七月に居所を徳島市二軒屋町に移し、自宅に「第二錬心舘」を建設した。五十八歳であった。昭和

三十八年十二月大澤孝彰が自衛官を退官して帰郷した。第二錬心館で他の門下生と練磨が開始された。大澤善二郎は昭和五十年五月九日七十二歳で他界された。

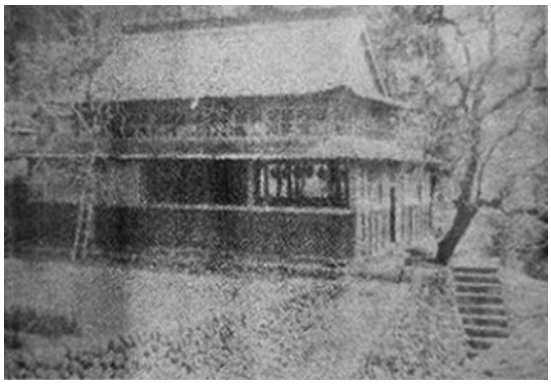
館長は大澤孝彰となり、「徳島錬心館」と改名され、多くの門下生と共に練磨し、館長・孝彰は昭和六十二年五月剣道八段となり、平成七年五月範士を授与された。

令和二年二月末、孝彰先生が九十一歳となり、徳島錬心館は閉館された。

九、丹生谷剣道

木頭地域を含め、木沢、上那賀、相生、鷲敷は相当広範囲な地域である。いわゆる那賀川流域とも呼ばれる地域は「丹生谷」と称され、剣道連盟の支部名は「丹生谷支部」である。過去においても現在においても丹生谷剣道の歴史は古く、剣道人口は多く、名士が多く誕生している。徳島剣道の発展に大きく貢献していることは言うまでもない。

これからも、木頭剣道が輝き、連綿と引き継がれ発展し、新たな歴史が築かれることを多くの剣士が待望しているところである。



大和塾道場

西岡信太

大和錬心館

大澤善二郎

名田の剣豪
笹田市之丞慧典（としのり）と田村楚一範士

徳島の剣道史　編集委員　三　木　　毅

一、はじめに

徳島県における明治以降の剣道史の探求作業を進めているが、存在資料が余りにも少なく、苦悩の境地に陥っていた。そこで、この窮地を打開する方策を考えたのが、明治期の新聞に剣道はどのように掲載されていたのかということであった。

奇しくも、剣道史の探訪に携わっている別宮憲治は、徳島市図書館に籍をおいていた経歴をもっていたことから、明治期の新聞に掲載されている「剣道関係記事」の探索を担当することとなった。当時の新聞は「徳島日々新聞」であり、努力の末に発掘した記事の一つに「死亡広告」があり、「追悼撃剣会を開催」という内容であった。それによると死亡者は「笹田市之丞」という剣道家であった。さらに関連記事よると「笹田市之丞は名田において、門弟三百人を有する剣道家である」ということである。「明治二十六年五月六日の徳島日々新聞」であった。

門弟三百人という道場主を連想すれば、かなりの名剣士となるのは当然である。そこに焦点を当てて是非とも探訪をしたいという気分となった。探訪を進めるうちに、筆者が中学・高校生時代に剣道大会場でお世話になり、誰もが知る「田村楚一範士」にたどり着くことができた。そこでその経緯を紹介することとしたい。

二、新聞記事の詳細

徳島日々新聞、明治二十六年五月六日付けには、二つの掲載があり、一つは、親戚、渡邊基、佐野八郎と門下生十八人による「翁笹田市之丞慧典義」とした「死亡広告」であった。また、その一つは「笹田市之丞の死去」とした、人物紹介の記事である。それによると「本県下にて有名な撃剣家。名田の、笹田市之丞は去る三月二十三日、病をもって死去された。八十一歳。氏は県下剣客中最も高齢の人にして、三百有余名の門下生があり、種々の免状を所持し居られる。氏の門人、大寺藤次郎、犬伏高蔵他十六人が発企となり、「明七日午後二時より名田河原において、盛んなる葬儀を行い追悼撃剣会を催す。」との記載があった。笹田市之丞を年齢から逆算すると、文化九年（一八一二年）生まれとなる。（明治元年時では五十六歳であった）

門弟三百人余や知人に向けた死亡広告によって執り行った葬儀と撃剣会には、相当の剣道家達が参集したと思料されるため、その様子を確認するため後継者を探訪して資料収集を進めることとした。

三、名田の笹田家

現在の「名田」とは、藍住町徳命字名田のことであり「笹田家」

を探索すると「笹田米穀店」が存在し、飛び込みで立ち寄った。同店には「笹田静子さん八十二歳」が健在であり、笹田市之丞の名前を切り出したところ、即座に「それは私の先祖です」とのことであった。

同家では、家系図が作成されており、元来は「渡邊総次郎姓」であったが「蜂須賀公から「笹田姓とせよ」とのことで「笹田姓」を名乗るようになった。市之丞は、武道家であったことから、蜂須賀公に認められたと思われる。笹田家初代当主が「笹田市之丞慧典」である。市之丞には二人の息子があり、後継者は二代目「笹田又平（又兵衛）」で、又平の実弟と思料される「勝次郎」が分家され、板野町に住居を構えて武道場を備えていた。

本家笹田家は名田に居住し、又平の長女「ノブエ」に「佐野家」から「林蔵」を婿養子にして、その子笹田保ほか四人の息子と一女が誕生した。保の実弟には、後述する田村楚一がある。静子さんから「うちの先祖は蜂須賀公から苗字をもらった。立派なお墓が千光寺敷地内にあり、墓研究者から取材を受けたことがある。」とのことで名家ぶりの一端に接することとなった。

四、亀趺墓に眠る剣豪

趺（ふ）とは、石碑とか墓碑の台座を意味し「亀」の字を用いているから「亀趺」となり、墓であれば「亀趺墓」であり、碑であれば「亀趺碑」となることがわかった。恥ずかしながら初めて知る分野のことであった。

亀趺墓碑は中国で、一五〇〇年以前から貴族の墓碑として用いられ、江戸時代に日本に伝えられ全国に広がりをもたらしているという。すなわち亀碑墓は地域において大名級をはじめ藩の重要人物などに建立が見られるという。

徳島県における亀趺墓の研究がなされており、亀趺墓は数が少なく地域の功名な人物の墓とされている。千光寺には亀趺墓として「井上不残」「笹田市之丞」「笹田又平」の三基が存在している。高貴な人物の墓に用いられた例からするとこの三者の武道家は、相当の評価がなされたものと思われる。

五、笹田市之丞とその子笹田又平・笹田勝次郎の功績

本県の剣道史資料に、明治十八年四月三日出版の「徳島県阿波国市郷壹般撃剣英名録」が残されており、四六一名の剣士が、大関を筆頭に番付表として表示されている。なお、この時代には番付表が流行した模様で、相撲番付、所得番付などがあり剣道界もその例に倣った番付表が残されているわけである。ところが当時の番付表では、今でいう「横綱」という階級はなかったという。すなわち大関以下の階級で表されている。笹田又平は小結に位置している。笹田勝次郎は表枠に添えられた役付きと思われる位置に大字で「前頭」または「頭取」と読める冠名が付けられ、笹田勝次郎と記載されている。

また、明治三十二年二月二十六日の大日本武徳会徳島支部開会式剣槍組合名簿では、笹田勝次郎が阿波の佐藤栄太郎と対戦する

組み合わせ表があり、そこに登場している。

笹田市之丞は、明治十八年の英名録作成時では七十三歳であり登場しておらず、明治三十二年の剣槍組合名簿作成時は他界している。よって市之丞の登場記録は確認できなかった。しかし、藍園村史の井上不残の記事の中では不残は「市之丞は高弟である」と論じていることや亀趺墓が建立されていることから察すると相当の剣士であったと推察できる。

笹田勝次郎については、板野町史によると「本町の剣道の盛んになった草分けは、大正初期大寺で道場を開いた関口流の笹田勝次郎氏に始まる。」と記載されており、先駆者としての功績が読み取れる。

六、剣豪笹田市之丞の師匠

板野郡藍住町の前身である藍園村史によると、徳命に所在する千光寺は勝瑞城の支城される「徳命城」の跡地に建立されている。この徳命城に仕えていたのが関口流の達人で「井上不残（ふざん）」である。井上不残は奥州の「佐竹出雲守」の子孫とされる。藍住町の諏訪神社（藍住町奥野字山畑一四八番地）の東約百メートルに「佐竹出雲神社」が現存している。井上不残は三百人の門人がおり、その道場は、藍園村役場の所在地であったとの記録が残されている。

藍園村は、一八八九年（明治二十二年）に成立しており、村役場は、現在の藍住町役場と同場所である。（藍園村史及び藍住町史の庁舎所在地の経緯度により確認済み）すなわち、藍園村役場は、井上不残が道場としていた場所を村役場としていることから、道場の建物を村役場として活用したのでないかと推認できる。

井上不残の道場については、別の記述において、現在の藍住農協藍園支所（現在の藍住南小学校の北側）の場所が道場で三百人の門弟があったという記録が存在する。これは、藍園村役場に道場を譲り、新たに道場場所を設けたのかどうかは確認する資料は明らかにできなかった。

藍園村が成立した明治二十二年以前の年代においては、藍園地域において剣道が盛んであったことが明らかとなった。

井上不残は、門人の中でも、笹田市之亟という剣士について、高弟という高い評価をしている。

七、井上不残と笹田市之丞の年齢の考察

井上不残は、一七五六年（宝暦六年）生まれであり、五十六歳時に笹田市之丞が誕生している。井上不残は、一八四〇年（天保十一年六月十四日　八十四歳）で他界している。この時、笹田市之丞は、二十八歳であった。井上不残の門弟三百余人は、井上不残が「高弟」とする笹田市之丞が引き継いだと考えられる。二十八歳時の市之丞がこのような評価を得たのは相当の実力を有する剣士に成長していたことを物語っている。

笹田市之丞は子息として「笹田又平（又兵衛）と笹田勝次郎」を誕生させており、親子共々高名な剣道家となっている。

八、田村楚一範士

田村楚一範士は、これまで記述した笹田家三代目の笹田林蔵の四男として大正三年八月十五日に生まれ、東洋大学に進んだ後、帰県し、田村家の婿養子となり教職の道を歩んだ。この間剣道の修練を重ねた。徳島県剣道連盟では、昭和三十年から十年間という長きに亘り理事長の要職を務められた。徳島工業高校に長く在籍したほか松茂中学校校長などを歴任している。昭和四十五年八月二日付けで「贈 田村楚一」という掘り込みがある「和太鼓」が剣道連盟に寄贈されている。この時先生は五十六歳であった。令和四年十二月現在この和太鼓は、県立鳴門ソイジョイ武道館の舞台に鎮座している。道場には和太鼓を備えるのは慣わしとなっており誠に結構なものを寄贈された。和太鼓の価格は今も昔も高価な物で、寄贈の和太鼓は、直径四十五㎝あり、五十六歳の先生の月収よりは高価なものであったと思われ先生の心意気を物語っている。

先生の剣道にかける情熱や意気込み、更に気働きは多くの人に感動を覚えさせるものであり、昭和六十年一月二十一日に、七十歳にして範士の称号が授与された。

筆者は昭和三十二年から剣道を始めており県大会の場で、田村先生が理事長役として大会運営を仕切っていたのを鮮明に記憶している。顧みると、田村範士が理事長時代に采配を揮ったことを知りうる年代は、昭和十五年から二十五年ころに生まれた剣士達であろうと思われ、田村範士のお世話役に感謝の念をもっていると思われる。

田村範士は、昭和六十一年一月二十七日、七十一歳で他界された。

九、まとめ

筆者は、別宮憲治が収集した明治の新聞記事の「三百人の門弟がいた」という点に何故か強く気を惹かれ深堀りすることに駆られて足を運ぶこととなった。奇しくも、その結果において「田村楚一先生の理事長時代」の姿を思い出すことに繋がったことに感慨を覚えている。

今回、深堀りすることに強く惹かれたことが、人生行路の身近なことに結び付いたことに、探訪してよかったという気分となった。そのよき気分をもって、ご長男の田村俊明氏に、家のルーツを含めたことをご報告ができたことは大きな喜びと佳き思い出となった。

範士となられた田村楚一先生から直接指導を受けられた剣士諸氏が田村先生の実働功績を披露する内容が「徳島の剣道」誌上に掲載されること祈念している。

田村範士

田村範士寄贈の和太鼓

「剣道の中興は落羽の森より」
徳農剣道部での五十年

板野東支部　伊賀雅人

一　はじめに

私は高校生時代・教職時代、今又同窓会役員として徳農の校門をくぐっており、私は何時も徳農（農業）によって育てられたと感謝している。約五十有余年に渡って、徳農シンボルの落羽松並木や百年以上の大木の中を通って行くのである。平成七年三月に徳農剣道部創部八十周年を記念し、高さ三メートルの記念碑が、徳島農業高校（現城西高校）校門前の落羽松並木の中に威風堂々とたたずんでいる。「剣道の中興は落羽の森より」という文言の句が、初代徳農剣友会長の勝浦守範士によって刻まれたのである。大木並木は「巣立ちの森」の名称でその威厳を保っているが、母校はまもなく百二十年の歴史を迎える。校門をくぐると「我らは時代のリーダーである」の標柱が目に飛び込んでくるし、歴史を刻むソテツの大木が迎えてくれるのである。

平成三十年十月二十八日には徳農・城西剣道部創部百周年を記念して、下村富夫範士を冠する記念孫大会が実施され、創部百周年記念誌も発刊されている。

二　碑文に裏打ちされた事実

勝浦守会長による碑文「剣道の中興は落羽の森より」として刻む意味合いは、過去の歴史的剣道の場としての流れが徳農にあると言う強い表れであり、徳農剣道はここから発展してきたという思いの碑文である。この事実は、徳農を舞台にした高校剣道大会や、国体予選等を実施しており、大勢の剣士の交流や互いの修練の場として、歴代の剣道部顧問はお世話をさせて頂いている。大きな国レベルの行事が徳農で実施され、昭和三十五年度の全国指導者研修会や、昭和三十五年八月の剣道六段審査会の会場となっており、昭和三十六年には徳島県剣道同志会が徳農で開催される等、県下の中心的会場の役割を果たしてきている。名だたる剣豪が防具を担ぎ落羽松並木を歩き、校門前の標柱を見ながら徳農の体育館へと足を運び、剣を交えたのは歴然とした事実であり往時が偲ばれる。この時の徳農の体育館は県の武道館よりも広く、交通の利便性も良くその為利用されたと推察する。この石碑と老木や標柱は、戦前・戦後・現代へと大きな役割をつないできた礎であり、農業専門校として多くの大農や林業家を育生し地方の指導者やリーダーとなり、中には農林大臣賞を受賞する者も現れ徳島県農業を牽引しているのである。剣道部員は県下一円より集まり、遠くは木頭・一宇の山奥より徳農徹心会館で寮生活をして学問と剣道に励み、就職組や進学組は警察官や刑務官になる者、小・中学校や高校の教員となる者や大学の教員や大学剣道部監督をした

者がいる。中には小中の校長となり、小・中・高校の教育会の会長を務め、現在も町の教育長を務めている者もいる。徳農で育った剣道部員はそれぞれの村や町に帰り、県下一円で少年剣道教室を開き指導している。彼らが恩師下村富夫範士を冠する徳農孫大会として三十年の歴史を刻み、創部百周年大会を開催するなど孫大会の大きなうねりを作っている事実をこの碑文は物語っているのである。

三　戦前・戦後に活躍した徳農剣道家の師弟関係の不思議

徳農剣道の教えと歩みは、徳農剣道部は「大和の精神を中心とした限りない発展を続けて行くように」と、初代徳農剣友会長の勝浦守範士が剣友会規約に謳われている。そもそも徳農剣道の源流は、徳農剣道教師の久保源治郎利雄範士から始まる。（明治四十年～四十五年在職）で石井町久武館道場の館長で明治二十二年には柳生神陰流免許を受けている。その後明治二十七～三十七年各府県を巡り、佐賀・宮崎・福岡の指導者と成って全国的に活躍し、武名九州を圧して全国演武大会では十五人勝し、その剣声は日本中に鳴るほどである。明治三十八年に帰郷し、久武館道場を開設し、青年に剛健の精神と情操を養う。明治四十年徳島県立農学校教師に嘱せられ、大正十三年に徳島高等工業学校（徳島大学）の武道教授に嘱せられ、昭和三年に範士となっている。

戦前の剣豪としてその名を馳せた徳農剣道家を列記してみると、元旧制脇町中学校（現脇町高校）の剣道教師であった須見吉富範士は明治四十四年徳農卒業の範士八段で、下村・柴田・滝下先生等の脇中黄金時代を築いている。その当時の門下生四十八名が遺徳を偲び昭和五十二年脇町高校八十周年記念として、校門左側に須見吉富範士八段の顕彰碑を建立している。須見範士は久保源治郎利雄範士に徳農で指導を受け、明治四十四年三月卒業後四十五年に尋常小学校教員となり徳島中学校教師を歴任し、大正十二年脇町中学校教諭（大正十二年～昭和二十一年三月在職）となり、昭和三十年徳島県剣道連盟が発足するや顧問となり副会長も務め、昭和三十三年全日本剣道連盟の理事を務める。自らも石井町に雄心館道場を創設し、居合無双直伝英信流の使い手であり、剣道では田村楚一・近藤阿佐市・平尾勝美・美馬政男・高下正義先生等の剣客が足を運んだと言われ、県下の剣道家からは、古武士の風格を持つ剣豪として評されていたようである。

松尾誠一先生は徳農明治四十五年の卒業で、徳農と久武館道場では須見範士と同門で先輩後輩である。久保源治郎範士に指導を受け徳農剣道教士として大正十一年～昭和十二年まで多くの人材を育てている。特に、県下十六チームのリーグ戦で優勝し、全国大会では鉄道局チームと戦い善戦し、大きく評価され全国に徳農の名を知らしめた。その時の先鋒の高橋静夫氏は昭和十二年卒業で地元中学校の生物の教師となり、高原少年剣道教室も指導し、初代名西支部長として石井地区の剣士を育てている。

勝浦守範士は昭和十一年の卒業で、昭和十一年～十二年まで徳農剣道部助教として鉄道局チームとの大会を始め、戦前の徳農剣

道部黄金時代を作った指導者の一人である。勝浦範士は戦前・戦後大活躍し、昭和六十三年第十回全日本高齢者武道大会剣道Ａ組優勝の戦歴を有し幾多の大会でも活躍している。平成七年に徳島県剣道連盟審議委員長となり、少年剣道では徳島剣道教室や敬愛道場の師範として子ども達を指導し、多くの指導者の育成は徳島県剣道発展の牽引役として貢献し、徳農孫大会を実現させた中心人物である。

昭和十六年徳農卒業の平尾勝美範士や山田仁先生がいるが、平尾範士は卒業後鴨島町の徹心道場で居合道と少年剣道や青年を指導し、居合道範士八段であり県審議委員も務め、麻植郡剣道では徳島県剣道連盟名誉会長の三木毅先生なども指導を受けている。現在居合の徹心道場は、徳農後輩の昭和三十五年卒業の一番弟子の吉岡修一先生によって多くの門下生を指導している。

同期の山田仁先生は青年師範から母校の農業教師として勤務し、昭和二十八年下村先生の徳農への転勤を機会に「剣道やらんか」の話となり、講堂の机を片付け練習をしたのが徳農剣道の再開であり、後の吉田博三さんを始めとする戦後の黄金時代を作ったのである。

下村富夫範士は脇町中学で須見範士の指導を受け国士舘大学に入学し、卒業後は江原中学校教諭から突如昭和二十八年八月の異例な時期の人事異動で、城西高校（徳農）に転勤を命ぜられた。この人事の意味合いは徳農剣道の再興ではなかったのかと私は推察している。特筆すべきは多くのインターハイ出場や、昭和三十一年の第十一回赤穂国体で徳島県始まって以来の第三位を獲得した指導者であり、以後多くの有為な人材を育てている。中でも突きの名手で、後に法政大学監督となった吉田博三さんは、赤穂国体で下村先生譲りの見事な諸手突きを放ったことはあまりにも有名である。

後任の塩田善治先生（現剣道連盟審議委員）は脇町高校から国士舘大学へ進学した下村先生の後輩である。脇町高校時代は滝下勝先生が師匠で、その師匠は須見吉富範士の師弟関係である。つまり、剣道の爺さん曾爺さんが活躍した徳農へ赴任した事は里帰りである。昭和五十年～六十年在職で、塩田先生は徳農が高校剣道大会の会場の関係から会場校としてのお世話をしたり、県下学校剣道指導者のリーダー的存在でもあり、徳農での合宿が恒例となり大勢の生徒や先生が徹心会館で合宿し、多くの学剣連の指導者、生徒を育成している。夜遅くまで剣道談義をしたことが懐かしく、今でも当時の話が出る度に、私に大きな剣道観を与えてくれたことに感謝するのです。この様な徳農剣道の本流は、久保源治郎範士から須見吉富範士、松尾誠一先生、勝浦守範士、山田仁先生、平尾勝美範士、下村富夫範士、塩田善治先生へと続き、その広がりは現在でも徳農・脇高卒業の指導者が、剣道連盟の中核的役割を果たしており、大木から現在も太い枝葉となって立派に活躍しているのは事実である。

四　徳農剣友会孫大会について

第一回徳農剣友会孫大会は昭和五十八年三月に、下村・山田先生の教え子の孫大会として開催された。教え子の弟子が地方へ帰り少年剣道を指導していることで、これ等の少年剣道教室の合同練習会を実施していた。その後恩師下村先生を冠する孫大会にしたらとの話から、徳農剣友会会長の勝浦守先生の御推奨で下村先生教え子と孫が錬成し一同に会する試合、いわゆる錬成孫大会を実施してはとの話となり開催する運びとなったのである。当初は勝浦範士を中心に平尾範士や山田仁先生の、戦前組お三方が資金面を大体的にバックアップして頂き、第一回徳農剣友会少年剣道錬成大会が実現したのである。

特に大きな記念大会は、第九回の平成三年に平尾勝美先生居合道八段の昇段を記念し、平尾勝美先生居合道八段昇段祝賀大会として実施した。

第十二回（平成六年三月二十六日）大会では、第四十八回国民体育大会(徳島県開催)に徳農卒業の警察官の那倉文夫先生・美馬勝行先生と徳農剣道部顧問の飯田栄一教諭が出場し、徳島県チームが見事優勝し、国体優勝祝賀大会として盛大に開催されたのである。

第十三回大会（平成七年三月二十六日）は、徳農剣道部創部八十周年碑建立記念大会として、「剣道の中興は落羽の森より」の記念碑を落成し実施した。

第十五回は団体戦を実施しては、との話が持ち上がり、第一回勝浦杯小学校・中学校男女の団体戦が実施されるようになった。

第三十回大会の節目の記念タオルは、美馬勝行先生（現剣道連盟審議委員長）の第三十三回全日本高齢者剣道大会B部門優勝が印入されており、その華々しい快挙に徳農剣道家や、徳島県剣道家の誇りとして称賛した華々しい大会となった。

現在徳農・城西剣友会は月一回の練習会を実施しているが、再び孫大会が実施出来ることを期待している。

五　北島中・徳農・脇高の指導者の関係

私の中学校の剣道であるが、昭和三十六年に北島中学校で初めて竹刀を握り、我が家に有った竹胴の防具を持参し練習した。思い出は当時板野郡では北島中学校と吉野中学校が双璧であり、ある試合の日に師匠より先生の黒胴を附けて試合に出なさいとのご指示で、小さかった私には大きすぎる胴であったが着用させて頂き有頂天で何と誇らしかったことか、この年齢になっても当時を思いだし幸せ感がよみがえります。最近御自宅にお伺いする機会があり、娘さんが直前まで「伊賀君、伊賀君と言ってましたわ」との表現に、何とありがたいことかと涙ぐんでしまいました。

田中先生は板野町矢武ご出身の国語教師で剣道部の御指導を頂いた。私が構えると先生には気責め的に動かされ打たれた、この師匠の攻め技は大きな影響を受けたものである。不思議なことに田中先生の師匠は近くの板野町那東の近藤阿佐市先生で、久保源

治郎利雄範士の久武館道場の門下生でもあり、須見吉富範士や松尾誠一先生や石井隆介範士とは同門であり不思議な関係である。私の徳農への御縁も不思議で、当時剣道連盟会長の三木只雄範士が北島中学校の体育館へお運びを頂き御指導を頂いていた。私が三年生のある時三木先生が、「徳農に下村という先生が居るので伊賀君、徳農へ行きなさい」とのお話があり、下村先生との出会いを頂く機会となったのです。不思議なことは繋がるもので、下村範士の脇町高校の師匠は須見吉富範士で久保源治郎範士と師弟関係、塩田先生の師匠滝下勝先生も須見範士と師弟関係で、田中先生師匠の近藤阿佐市先生も久武館・雄心館の同門関係にあり、共に名西郡・麻植郡・板野郡の多くの剣士が修練を積んでいたことが分かり、今でもその剣豪の人脈が県下一円に繋がっている太い糸を感じるのです。私はこれ等の各恩師の不思議な繋がりを、徳農創部百周年誌の徳農剣道部史執筆者として調査している。

県内支部の歩み

阿南支部

徳島の剣道史編集委員　別宮憲治

一　明治初期

佐藤貫心流富岡道場

藩政時代末の阿波で最も盛んであった貫心流剣術は、元禄年間（一六八八～一七〇三）に芸州広島から溝口甚五右衛門（鉄柱無端）が徳島市の眉山南麓仏日山竹林院永明寺に来て多くの逸材を育てたことに始まる。無端の門下生のひとりであった玉置常左衛門近正はその弟子である佐藤忠右衛門俊信（原士七条家の家臣）を指南。俊信は子の忠左衛門信行を、信行は常右衛門信矩を、信矩は忠右衛門正信を、正信は兵太郎信行を指導して、佐藤家は五代続いて師家を継承している。四代佐藤忠右衛門正信は阿波藩家老賀嶋家の招請を受け、幕末から明治三十年頃まで富岡で賀嶋家の家臣や一般人を指南した。

佐藤師家は、代々麻植郡麻植塚村（現吉野川市鴨島町）で居住していたので、佐藤家の菩提寺は鴨島町麻植塚の西円寺で墓は向麻山西端の墓地にあるが、四代正信の墓は阿南市富岡町石塚の景徳寺にある。（注①）（「第十七号」貫心流剣術の道統〈坂本裕二〉）

※注①　佐藤忠右衛門正信

天保十二年（一八四一）麻植郡牛島村麻植塚に生まれる。名を勇之助と称し、家は代々貫心流の師家で幼時より剣を父信矩に学び、後諸国を遊歴して技を錬磨した。那賀郡で一万石を知行する藩の国家老賀嶋家の知遇を受けて、富岡町で貫心流の道場を開いた。士分・庶民を問わず郡の内外からその剣風を慕う門人がはなはだ多かったという。二十七歳で明治維新を迎え、三十四年八月六日逝去、享年六十一歳。富岡町石塚の景徳寺共同墓地に葬ると「阿波名家墓所記」に記す。（「第6号」貫心流・佐藤忠右衛門の伝書〈平岡竹雄〉）

また、丹生谷支部史編集委員会の研究で、和食では初代佐藤忠右衛門俊信の時代から師家の指南で貫心流剣術の稽古をしていたことが明らかになっている。（注②）

※注②

「鷲敷町では、文化・文政のころ麻植郡牛島村麻植塚の人で貫心流佐藤忠右衛門が和食へ剣術を教えに来ていた。豪商花屋で泊り、十数人が門下生になっていた。蛭子神社で撃剣大会を度々開いたというから蛭子神社の境内で教えていたのかも知れない。

阿井村庄屋で郷鉄砲の加藤光平、百合村医師岩代宗節の二名は免状をもらい、其の他数名は目録をもらった。（光平の長男で庄屋を継いだ清太郎が書いた天保正記に書かれている。）

常右衛門の死後、その子忠右衛門が指南しに来ていた。東山清兵衛・花屋熊助、その子伊之介など多勢が稽古をしていたようだが名は残っていない。」

（「第二十七号」〈吉田祖〉）

徳島県文書館が佐藤家文書に基づき作成した「佐藤家貫心流剣術入門者数〜地域別〜（平成十五年第二十六回企画展）」によると総数六六一人中、那賀郡二四五人、勝浦郡一八〇人、海部郡六人で、県南に多くの門下生がおり、歴代佐藤師家の県南での活発な活動が窺われる。

神陰流大野道場（西岡道場）

明治のはじめ、旧大野村（現阿南市下大野町）に神陰流西岡道場があった。神陰流伊藤一刀斎の奥儀を学んだ西岡嶋大郎が私財を投じて下大野町大平の地に開いたもので、自らが指南役となり村内や近隣の青壮年を集めて剣の道の振興に力を注いだ。（「第十三号」神道無念流、初巻切紙〈西岡侃〉）

その門下生の中でも近藤信蔵・安部十兵衛、大野駐在所巡査近藤実らが允許（免状）を有して活躍した。

明治四十二年ころには下大野町板東範太郎が中心となり仕合や大会が行われた。（「阿南支部の沿革」〈西岡侃〉）

二　武徳会創立期

武徳会徳島支部設立記念大会

「徳島県阿波国市郷壱般撃剣英名録（明治一八年四月三日・都弥次郎出版）」には西の大関・勝名村の山根正雄に対し、東の大関に富岡町の佐藤忠平を上げている。佐藤忠平は、明治三十二年（一八九九）二月二十六日大日本武徳会徳島支部開会式剣槍組合では、三十二名の一人として審判係を務めている。審判係には大島半作・梶浦四方・山根正雄・高木義征。中田義則・浅野幸尚・是澤宗馬ら、徳島支部創立に関わった錚錚たる剣士が名を連ねていることから、富岡町の佐藤忠平は那賀郡内で指導的な立場にあったものと思われる。当時、富岡町には、佐藤忠右衛門が開く貫心流道場があり、佐藤忠平と正信との間に何らかの関係があるものと考えられるが詳細は分からない。ちなみに、この大会には佐藤貫心流五代目の佐藤兵八郎は撃剣表方（貫心流居合）を披露したほか、審判係を務め、名西支所所属で組合名簿にも名が見える。

開会式剣槍試合には那賀支所所属の五十六名の剣士が出場しており、当時那賀郡内で撃剣稽古が盛んに行われていたことが窺われるが、いずれが佐藤貫心流門下であるかは明らかではない。（注③）

※注③　大日本武徳会徳島支部開会式剣槍組合那賀支所出場者

天部忠蔵・明石角太郎・阿部益尾・岩瀬要蔵・伊藤元六・池田眞一郎・井上榮吉・池田榮一郎・江濱重次・岡本清太郎・大西貞八・岡久政次郎・木村三蔵・岸喜七郎・木村與一郎・桑村榮次・桑村治太郎・小西仁平・近藤述蔵・小西久吉・佐藤英一・酒井栄吉・坂本治太郎・佐藤利吉・島田増吉・塩田巌・篠野秀蔵・下村武一郎・杉原寛蔵・竹内時次郎・内藤勇太郎・新居勝蔵・西政助・西重五郎・西尾源吾・根来浅太郎・野々宮喜和蔵・橋本佐一・久松為吉・平田利太郎・東山鹿五郎・東山康五郎・船越益蔵・三橋齋・森徳太郎・森本豊三郎・柳澤芳太郎・山田幸次郎・湯浅定平・湯浅鹿松・湯浅常夫・湯浅千野・湯浅正三・吉森兵次郎・吉原源八・米澤茂一（注・大正十五年七月に富岡警察署から鷲敷警察署が分離独立するまで、丹生谷地区は那賀支所に

含まれる。）

青年団における剣道の実施

明治になると、村々に受け継がれていた若者組の活動を引き継ぐ形で青年会が誕生した。阿南市域では明治十九年に新野青年会が最初に組織された。続いて、二十八年椿泊・福井、三十一年大野、三十二年中林、三十三年には答島に青年会が誕生している。

明治三十八年、明治政府は「青年団体向上発達ニ関スル件（内務省地方局長通牒）」を発し、青年団体の設置を奨励している。この通牒以降、楠根（明治三十九年）、桑野（明治四十年）、長生（明治四十一年）、加茂・大井・宝田（明治四十二年）、吉井・伊島（明治四十二年）、椿（明治四十五年）、蒲生田（大正元年）、見能林（大正二年）等々、全ての部落に青年会が設置された。

やがて青年会は青年団と改称され、大正四年青年団令が公布されると、それまでの小部落単位から町村単位に統合された。

「村史平島（大正十二年発行）」によると、赤池・古津・西原・中島・福井・三粟・大京原・刈屋・工地の各部落の青年会を結集して、村長を会長に副会長に尋常高等小学校長を選出、大正三年三月に平島村青年会発会式を挙行している。（「那賀川町史・上巻」那賀郡那賀川町・平成十四年三月三十一日発行）

青年団活動の重点は、義務教育を終えた二十五歳以下の青少年に対する補習教育に置かれていたが、講和会・講習会の開催、夜学会の指導、巡回文庫の設置、農事研修、先進農村の視察旅行、体位向上を目指す各種競技会（陸上、水泳、相撲、武道等）等広範囲な活動を展開した。（「阿南市史第三巻」平成十三年六月十五日発行）

大正九年（一九二〇）の文部省報告によると、全国で最も多くの青年団で実施していた運動競技は剣道（撃剣）で、二番目相撲、続いて各種競争、体操、柔道という順になっている。（「全国青年団の訓練と体育」文部省通学務局、一九二〇年）

大正十一年十一月昭和天皇が皇太子の折に行啓された折、師範学校で行われた撃剣仕合に、大野青年団選出の高井繁徳、天野静男の両名が出場し台覧の栄に浴した。（「阿南支部の沿革」〈西岡侃〉）

昭和十二年頃からは、戦時非常体制下で青年団は戦技訓練や勤労作業に明け暮れるようになった。（「阿南市史第三巻」平成十三年六月十五日）

学校剣道

明治二十九年（一八九六）那賀郡富岡町に設置された徳島県尋常中学校（現城南高等学校）第二分校が、三十二年に富岡中学校となった。明治四十四年に心身の練磨を目的に撃剣及び柔術が中学校の正科になる。富岡中学校でも剣道師範を置いたと思われるが、明治期の実態は明らかではない。以下は「徳島の剣道」の記事から富岡中学校剣道部の師範と、卒業生を拾ったものである。

○徳島県立富岡中学校剣道部師範

山内　熊一　大正十一年に小延従二が入学した時の師範

大畑兼三郎　昭和三年、平岡竹雄が入学し剣道の手ほどきを受

ける。武専卒

小浜重徳　明治三十五年十二月二十八日～昭和四十三年五月三十一日没　平岡竹雄が三年生の時に剣道の技を学ぶ

○徳島県立富岡中学校剣道部卒業生

原　寛一　明治三十七年十一月五日～昭和五十五年没　丹生谷支部二代目支部長

小延　従二　明治四十年十二月五月六日～昭和五十五年没　山口町　大正十一年富岡中学校に入学、山口小学校・大野小学校・長生小学校の校長を務める

藤本　幾久　明治四十一年十二月七日～没年不詳　大正十五年富岡中学校に入学、山内熊一・大畑兼三郎の指導を受ける。神職。昭和三十九年日野谷小学校「竜虎館」初代館長

平岡　竹雄　大正三年一月十三日～平成十九年二月十四日没　桑野町岡元　昭和三年富岡中学校に入学し、大畑兼三郎、小浜重徳の指導を受ける　大正五年六月一日～平成二年三月二十一日没　津乃峰町新浜　富岡中学校第三十四回生卒業生　武専卒　大正十一年四月三日～令和四年三月十六日没　鷲敷町和食　富岡中学校に入学して大畑兼三郎、小浜重徳の指導を受ける

大野小学校剣道部

大正十四年文部省が全国小学校に剣道を準正科に認めるようになるが、これに先駆け大正十一年大野小学校教諭として赴任した浅井眞一は、小学校高等科の準正科として剣道を教え、大野小学校剣道部を設立し多数の剣士を育成した。その第一期生に片田勢一、第二期生に堺与一、第三期生に清原榮がいる。また、そのころ立江小学校では石丸米蔵、坂野小学校では笹倉太郎がそれぞれ剣道部を創設して対抗仕合や大会が盛んに行われた。

昭和三年五月大野小学校主催第一回剣道大会が開催され多数の少年剣士が参加したが、特に徳島県師範学校剣道教師の近江佐久郎が門下生の清原榮ほか数名を引率して大会に参加し大会を盛り上げた。当時小学校に武道場がある学校は県下でも珍しく、この道場へ脇町中学校剣道部師範須見吉富が生徒を引率して合宿練習に訪れ、地元青少年の指導に当たるということもあった。（「阿南支部の沿革」〈西岡侃〉）

浅井　眞一　明治二十六年四月三日～昭和五十一年三月一日没　立江町　昭和五十一年五月八日範士号

三　剣道連盟那賀支部の誕生

昭和二十四年（一九四九）十月三十日徳島県体育剣道クラブが結成され、各郡市に支部を設置することになり、昭和二十五年三月十二日、山本忠蔵の発起により羽ノ浦岩脇小学校において那賀支部結成の運びとなった。参会者は、小浜重徳、国見彌市、山本

忠蔵、浅川馬蔵、磯部茂治、清原榮、松本一城、林裕一らで、支部長選任に当たり戦前功績のあった小浜重徳を推薦したが、家庭の都合で辞退され、国見彌市を初代支部長として那賀支部が誕生した。（注⑤）昭和二十六年十月二十八日、徳島県体育剣道クラブは「徳島県剣道連盟」に改称された。（「徳島剣道三十年の歩み」県剣道連盟　昭和五十八年）

※注⑤　剣道クラブ那賀支部設立会議参会者

山本　忠蔵　明治二十八年十一月一日～昭和五十二年四月二十九日没　羽ノ浦町　範士七段（昭和五十三年五月八日範士号）

徳島市春日町に生まれる。小学二年の時父から竹刀の握り方を教わり、長じて吉本末吉、近江佐久郎、高島永吉に師事して本格的な剣の修行に励み、昭和二年初段を受ける。昭和十八年召集、讃土部隊で終戦。復員後山本製材所を設立した。実業に精励する傍ら、昭和二十四年、剣道が解禁されると、徳島県体育剣道クラブの創設に参画し、那賀支部の結成に尽力した。二代目阿南支部長、剣道連盟審議員として剣道の発展に努める一方、町体協剣道部長、県老人クラブ連合会副会長、町社会教育委員長、町社会福祉協議会副会長等多くの要職を歴任した。（「徳島剣道三十年の歩み」県剣道連盟　昭和五十八年）

国見　彌市　明治十五年三月三日～昭和三十九年九月五日没　羽ノ浦町　教士七段

那賀郡羽ノ浦町古庄に生まれる。元警察官で熱心に稽古に励み、関口流の居合をよくし、一心流の鎖鎌の使い手でもあった。（「徳島剣道三十年の歩み」県剣道連盟　昭和五十八年）

浅川　馬蔵　明治二十四年七月十五日～昭和四十三年十月十八日没　羽ノ浦町古庄　教士六段

早くから浅川道場を開設し、那賀支部員の稽古場となった。国見彌市を師として関口流及び貫心流居合と一心流を稽古、師の仕太刀役をつとめていた。

磯部　茂治　明治四十年五月十日～平成十一年四月十五日没　那賀川町島尻　教士七段

清原　栄　明治四十三年七月二十六日から平成六年六月十日没　下大野町　範士七段（昭和六十二年五月八日範士号）

松本　一城　大正五年六月一日～平成二年三月十九日没　津乃峰町新浜　範士七段（平成二年三月十九日範士号）

林　裕一　大正十四年九月二十八日～昭和六十二年六月二十六日没　那賀川町大京原　範士七段（昭和六十二年六月二十六日範士号）

小学校五年生から天羽慶一に師事して剣道の手解

きを受け、徳島師範学校に進学して、石丸米蔵、藤川一太郎両師範の下で本格的な文武両道の道を歩む。三年生で二段に昇格、昭和二十年師範学校卒業後一時軍務に服したが短日で終戦となり、同年富岡小学校に赴任する。次いで富岡中学校・今津・鷲敷・富岡・阿南の順に各中学校を歴任、昭和五十年四月時点、阿南第一中学校教頭。

昭和三十七年五月九日七段に昇格、同年十一月二十六日教士号、昭和六十二年六月二十六日範士号を授与される。

大会出場の主なものは、全国教職員剣道大会に五回、四国四県剣道大会に五回、国民体育大会剣道競技に一回などである。

県剣道連盟理事、中学校体育連盟の剣道専門部長として県剣道界の発展にために尽くした。（「全日本武鑑（四国版第一巻）」株式会社地方人事調査会　昭和五十二年八月）

昭和三十三年五月一日、富岡町と橘町が合併して阿南市が誕生したことから、翌年四月一日、阿南市・那賀川町・羽ノ浦町の一市二町からなる那賀支部の名称を阿南支部に改称した。（注⑥）

※注⑥　阿南支部歴代支部長

初代　国見彌市　昭和二十五年四月～昭和三十二年三月

二代　山本忠蔵　昭和三十二年四月～昭和三十五年三月

三代　浅川馬蔵　昭和三十五年四月～昭和四十一年三月

四代　清原　榮　昭和四十一年四月～昭和五十七年三月

五代　遠藤一美　昭和五十七年四月～平成元年三月

六代　有賀秀敏　平成元年四月～平成十一年三月

七代　北條憲治　平成十一年四月～平成二十一年三月

八代　須藤恭宏　平成二十一年四月～平成二十七年三月

九代　坂本信幸　平成二十七年四月～令和三年三月

十代　村井正志　令和三年四月～

支部主催の県下大会の開催

昭和二十八年八月二十三日羽ノ浦町岩脇小学校講堂において那賀支部主催の第一回県下剣道大会が開催された。大会は、全日本剣道形、関口流形、一心流鎖鎌形、無双神伝抜刀術・長谷川流・大森流・貫心流・美信流・神道無念流等の形及び居合の演技があり、県下各地より参加の一七二名による団体及び個人試合が行われた。（「徳島剣道三十年の歩み」県剣道連盟　昭和五十八年）

支部主催の県下大会はその後も伝統行事として受け継がれ、昭和四十年より、高等学校男子団体の部が取り入れられた。その後中学校男子団体、小学校団体、高等学校女子団体が実施され、第二十六回大会より中学校女子団体の部も実施されるようになって、一般の仕合から小学生まで幅広い大会へと発展した。さらに平成十七年の五十回大会からは三人制女子団体戦も実施され、この大会には県下各地から一四三チームの参加があった。（「第二十二号」清原杯争奪第五十回県下剣道大会を終えて〈北條憲治〉）

浅川道場

浅川馬蔵が羽ノ浦町古庄の自宅に開設した。大正十四年生まれの遠藤一美・株木芳夫・濱田逸郎らのほか、一級下の尾崎行男、一級年上の川野らが稽古をしていた。（注⑦）（「第三十二号」〈北條憲治〉）

※注⑦　浅川道場の主な稽古参加者

株木　芳夫　大正十四年八月十九日～平成十三年十一月十日没　羽ノ浦町　教士七段

濱田　逸郎　大正十四年十二月十七日～平成二十七年十二月九日没　羽ノ浦町　教士七段

那賀支部が結成された頃から稽古に参加し、長年にわたり少年剣道など後進の指導にも尽力した。昭和五十八年より二十四年間にわたり、徳島剣道連盟の役員、徳島県高齢者剣友会会長を務め、平成二十二年度全日本剣道連盟剣道有功賞を受賞した。（「第三十二号」〈平正明〉）

尾崎　行男　大正十五年五月二日～平成十年七月十日没　羽ノ浦町　教士七段

大野武道同志会

大野武道同志会は昭和二十八年に片田勢一、清原榮、森本求、遠藤一美が創設し、有賀秀敏、西岡侃、池田正らの青年団員十一名が入部し、町外から磯部茂治。松本一城らが稽古に参加した（注⑧）。

清原・遠藤・有賀は昭和四十六年に大野小学校に剣道部を、また四十八年には更なる剣道の普及拡大を目指して阿南剣道教室を開設した。

大野小学校剣道部は西岡侃にゆだねられ昭和五十六年県下大会で初優勝した。卒業生は阿南第一中学校でも稽古に励み指導者に育っていった。

※注⑧　大野武道同志会

片田　勢一　明治四十二年一月五日～没年不詳　富岡町　錬士五段

清原　榮　明治四十三年七月二十六日～平成六年六月十日没　下大野町　範士七段（昭和六十二年五月八日範士号）

森口　求　大正九年七月十七日～平成二年八月二十八日没　平谷村出身　教士五段

那賀郡平谷村に生まれ、小学生のころから剣道を学び中川虎雄と海部郡まで稽古に通うこともあった。昭和十六年満州で軍隊に入隊、復員後、長安口ダム建設に伴い昭和二十八年五月八日上大野町に転居、大野農業協同組合に勤務、大野武道同志会で活動した。（「第七号」〈西岡侃〉）

遠藤　一美　大正十四年五月二日～平成三十年十二月六日没下大野町畑田　教士七段

有賀　秀敏　昭和十年九月二十五日～平成二十七年一月二日没

新野町の篠原家より中大野町の有賀家の後継養子となる。十八歳で地元の青年団として、大野武道同志会に加わり、片田勢一・清原榮・遠藤一美のもとで、西岡侃・池田正らと剣道

の稽古に励む。

昭和四十八年頃から阿南剣道教室の指導者として活動する。阿南支部の事務局長、阿南支部長、徳島県高齢剣友会理事長、副会長を歴任。（「第三十一号」〈西岡侃〉）

西岡　侃

昭和十年八月二十七日～令和二年九月二十五日没

昭和十九年、父正一の郷里である下大野に東京から戦争疎開する。昭和二十八年頃大野武道同志会に加入して、道場である大野公民館で稽古に励む。四十六年大野体育後援会の設立を機に、清原・遠藤・有賀らとともに大野小学校剣道部を創設し監督に就任する。（「第三十八号」〈西岡直彦〉〈池田洋一〉）

学校剣道の復活

戦後しばらく禁止されていた剣道は撓競技として復活し、昭和三十年（一九五五）頃には学校においてもクラブ活動で実施できるようになり、さらに三十八年には教育課程の改定により、高等学校では正課の中に体育三単位は格技（柔道・剣道・相撲）のうちどれか一種目を取り入れなければならないことになった。（「第二十三号」〈高木正義〉）

昭和三十一年、旧師範学校及び徳島大学学芸学部の卒業生らで「渭水剣友会」が結成された。会長に石丸米蔵、副会長に尾形郷一・藤川五郎が就任し、那賀郡では高田右喜二、小延従二、小島忠好、日切要、竹治昭義、新田守雄、天羽慶一、山田勝美、原貫一、亀井敏雄、生島貞雄、宮崎重治、松本一城、新居忠雄、松本幾二、西野実らが参加して教育者として学校剣道の発展に貢献した。（「ふるさと阿波（阿波郷土史会報）八十五」〈井上常之進〉）

○富岡西高等学校剣道部

富岡西高等学校では武道専門学校卒の松本一城が教諭として着任すると、正課として週一回男子生徒全員の剣道指導に当たるとともに、剣道部顧問として卓越した指導力で、県下高校剣道常勝校の礎を築いた。（注⑨）昭和五十三年に松本が勇退した後も、澤井勝之・本田敦彦・上田宏司らの熱心な指導により、多くの逸材を輩出している。（注⑩）

※注⑨

松本　一城　大正五年六月一日～平成二年三月十九日没　津乃峰町　新浜出身　範士七段（平成二年三月十九日範士号）

昭和九年富岡中学校第三十四回生卒業生　武専卒業後千葉県立銚子商業高校教諭に赴任、近衛歩兵第三連隊で終戦。昭和三十三年富岡西高校教諭、正課として週一回男子生徒全員の剣道指導に当たるとともに、剣道部顧問として数多くの剣道指導者を育てた。都道府県剣道大会に十三回、東西対抗剣道大会に五回、国民体育大会に数回、四国四県剣道大会に十二回、教職員剣道大会に五回出場。四十年の長きに亘り徳島県剣道連盟役員として剣道の発展に尽くした。（「第七号」〈西谷肇一〉）

※注⑩　富岡西高校卒業の高段者

松村　克隆　昭和十二年十二月二十一日生まれ　阿南市加茂町出身　徳島

県警察　教士七段

西谷　肇一　昭和二十六年十一月八日生まれ　那賀郡鷲敷町出身　教員　教士八段（平成二十五年五月一日八段審査合格）

須藤　恭宏　昭和二十九年一月十九日生まれ　阿南市才見町出身　会社員　教士七段

富田（旧姓紙本）正　昭和二十六年十一月八日生まれ　那賀郡鷲敷町出身　教員　教士七段

河田　清実　昭和二十九年六月二十五日生まれ　海部郡海南町出身　教員　教士八段（平成十六年五月二日八段審査合格）

大石　正志　昭和三十年三月十九日生まれ　阿南市桑野町出身　教員　教士七段

加藤　哲裕　昭和三十年十二月二十六日生まれ　那賀郡相生町出身　教員　教士七段

福多　雅英　昭和三十四年十一月三日生まれ　那賀郡鷲敷町出身教員　教士七段（三年生時顧問・大平憲一郎）

本田　敦彦　昭和三十四年七月二十二日生まれ　小松島市出身　教員　教士七段

鈴木　啓三　昭和三十六年十一月二十三日生まれ　阿南市宝田町出身　会社員　教士七段（顧問―西谷肇一）

上田　宏司　昭和三十七年九月十日生まれ　阿南市羽ノ浦町岩脇出身　教員　錬士七段（顧問―澤井勝之）

玉田　晋作　昭和四十年八月十五日生まれ　阿南市見能林町出身　教員　教士八段（平成二十九年十一月三十日八段審査合格）（顧問―澤井勝之）

敦賀　晋平　昭和五十四年七月三日生まれ　阿南市富岡町出身　郵便局　教士七段

大石　洋史　昭和六十一年十月二十四日生まれ　阿南市桑野町出身　教員　教士七段

笹谷　誠史　平成二十五年五月剣道八段合格　阿南市下大野町出身　香川県在住・四国電力勤務（顧問―澤井勝之）

○阿南工業高等学校（現阿南光高等学校）剣道部

阿南工業高等学校剣道部は、昭和三十九年、剣道同好会として発足。昭和四十三年五月剣道同好会の顧問に鎌田恵が着任、昭和四十四年体育館が竣工し剣道部が発足した。顧問の鎌田恵と部外講師の清原榮の二人三脚で阿南工業高校剣道部の礎が築かれた。（注⑪）その後（平成二十六年時で）、全国高等学校総合体育大会に十一回出場、全国高等学校選抜大会に四回出場するなど、阿南工業高校剣道部（男子）は、県内一、二を争う強豪校になり、多くの逸材が巣立っていった。（注⑫）（「第三十一号」〈熊澤信行〉）

※注⑪

清原　榮　明治四十三年七月二十六日～平成六年六月十日没　阿南市下大野町大平　範士七段（昭和六十二年五月六日範士号）

小学校時代に浅井眞一から剣道の手ほどきを受け、徳島師範学校に進学し、近江佐久郎・藤川一太郎に師事した。昭和七年美馬郡半田小学校に奉職、昭和四十四年阿南市吉井小学校校長を最後に勇退。鎌田の誘いを受けて阿南工業高校剣道部

師範となり、高校生のほか、少年剣士から社会人剣士まで幅広く後進の指導育成に当たり、八十二歳まで竹刀を振り続けた。

大野武道同志会会長を初め、剣道連盟阿南支部長、県剣道連盟副会長、県高齢剣友会理事長等を歴任し、剣道界の発展に尽力した。（「第十一号」〈西岡侃〉）

※注⑫　阿南工業高校卒業の高段者

野々宮眞佐夫　昭和二十八年四月三日生まれ　那賀郡鷲敷町出身　商業　錬士六段

坂本　信幸　昭和二十九年三月三十日生まれ　阿南市上中町出身　教員　教士七段

米倉　滋　昭和三十年一月二十九日生まれ　阿南市水井町出身　自営業　教士八段（平成十七年十一月二十八日八段審査合格）

近藤　亘　昭和三十年三月七日生まれ　那賀郡鷲敷町出身　徳島県警察　教士八段（平成十九年五月二日八段審査合格）

村井　正志　昭和三十三年三月十日生まれ　阿南市西路見町出身　教員　教士七段

熊澤　信行　昭和三十四年八月十五日生まれ　小松島市出身　会社員　教士七段

池田　洋一　昭和三十七年一月二十二日生まれ　阿南市上大野町出身　教士七段

曽根　徳治　昭和三十八年三月二十三日生まれ　羽ノ浦町岩脇出身　教員　教士七段

四　平成から令和へ

第四十八回国民体育大会

平成五年に東四国国体剣道の部が徳島県（高校男子女子・小松島市、成年男子一部二部・徳島市）で開催された。坂本信幸は県競技力向上対策本部係に配置された。遠藤一美総監督、近藤亘強化部長のもと、少年男子は、西谷肇一監督、福多雅英コーチの指導により第二位になる。少年女子は河田清実監督、本田敦彦コーチが指導に当たるが、有力選手の不慮の怪我があり第五位。成年男子一部は、松村克隆監督、坂下彦之コーチ、成年男子第二部は、高下正義監督、白木洋一コーチを中心に強化にあたり、成年一部第三位、二部優勝を果たし、全種別入賞による初の総合優勝という金字塔を打ち立てた。（「第三十一号」〈坂本信幸〉）玉田晋作は、成年二部団体に先鋒として出場し、四試合全勝して二部優勝に貢献した。（「第三十四号」〈澤井勝之〉）

富岡東高等学校剣道部

昭和六十二年六月の四国高校剣道選手権女子団体戦で、富岡東高校（河田清実監督）が優勝した。県勢女子の優勝は四十四年の脇町以来で、男子の優勝はまだない。（昭和六十六年六月二十二日徳島新聞）。同年八月の全国高校総体（北海道）で富岡東高校女子は団体ベスト八に入賞した。（注⑬）富岡東高校は、翌六十三年四月の県剣道連盟会長杯争奪剣道大会では、男女が揃って優勝し、四国大会（高知市）では、女子が前年に続き優勝して二連

覇を果たした。

その後、高校男子は、東四国国体の団体強化指定校となった城ノ内、小松島を始め、富岡西、阿南工、川島等が鎬を削っている。高校女子にあっては、富岡東高校が、平成七年、八年、十三年全国高校総体で三位に入賞するなど全国レベルの強豪校として活躍している。

※注⑬

河田　清美　昭和二十九年六月二十五日生まれ　海部郡海南町教士八段

小学校五年生で剣道を始め、富岡西高校、筑波大学と進み、四年生で全日本学生剣道優勝大会ベスト八の成績を収めた。大学卒業後教育者の道を進み、昭和五十八年から平成十三年まで富岡東高等学校で十八年間勤務。同校女子剣道部の黄金時代を築いた。

昭和六十二年度徳島県剣道連盟優秀指導者賞を受賞した。

少年剣道教室

昭和六十年頃には、少年剣道熱が盛んになり、県下で七九教室（小学生男子二三〇〇人・女子四五〇人）を数えた。阿南支部内では、大野小学校剣道部（西岡侃・三十人）、阿南少年剣道教室（清原榮・八十一人）、泊滝館（坂田敏郎・三十人）、橘少年剣道教室（土井司・三十八人）、福井少年剣道クラブ（株木芳夫・二十四人）、那賀川少年剣道クラブ（磯部茂治・三十人）、平島少年剣道クラブ（鍛冶唯敏・三十五人）、育英館（加林敏央・二十五人）、羽ノ浦少年剣道教室（尾崎行男・三十四人）の九教室が開かれていた。その後も、加茂谷少年剣道クラブ（藤田繁）、桑野川少年剣道教室（鎌田吉仁）、錬武館少年剣道教室（茂崎光昭）などが新たに開設された。

小学生を対象とした少年剣道教室は、地域の理解と支援を受け、指導者の献身的な努力で児童の健全育成に努めた。稽古の励みのために開催される県下大会では、阿南支部内の剣道教室が毎年上位に入賞している。

少子化の影響で、令和元年時支部内で活動する少年剣道教室は、全盛期の半数の八教室に減少した。（注⑭）

※注⑭　令和元年時阿南支部内の剣道教室

・大野小学校剣道部（大野小学校体育館・西岡直彦）

昭和四十六年清原榮らが開設、県大会八回優勝、昭和五十八年には四十八人の部員が、平成十八年度の新入児童が十五人程となり、部員も数名に減少した。平成十八年度全日本剣道連盟少年剣道教育奨励賞受賞。（「第二十三号」〈西岡侃〉）

・阿南少年剣道教室（阿南市武道館・須藤恭宏）

昭和四十八年清原榮、有賀秀敏らが開設、阿南警察署、富岡セニア会館、富岡小学校体育館、阿南市武道館と道場を移す。昭和六十年七月全日本武道錬成大会で準優勝。一時八十人を超えた部員は、平成十九年には二十九人となった。須藤恭宏、有賀秀敏、北條憲治、大津裕哉、中西実、桝山紹生、林洋行、西岡洋幸、福井勝らが指導稽古。平成二十年度全日本剣道連盟少年剣道教育奨励賞受賞。（「第二十四号」〈須藤恭宏〉）

・新野少年剣道教室（新野小学校体育館・馬見和秀）

昭和五十八年馬原文彦（馬原医院院長・後援会会長）が遠藤一美を室長に迎えて開設。新野小学校教頭・川上満を監督に、小学三年生から六年生の四十人が参加したが、その後少子化で激減。新野哲朗・磯田尚文・田中昭次・金久博・仁木香が指導稽古。平成二十二年度全日本剣道連盟少年剣道教育奨励賞受賞。（「第二十七号」〈馬見和秀〉）

・那賀川少年剣道クラブ（今津小学校体育館、那賀川B＆G体育館・二反田和則）

昭和四十六年今津小学校体育館を道場として磯部茂治を中心に開設、四十名近い小学生を中学生、高校生が元立ちで稽古。十三年から山田耕司・磯部恭司・二反田和則が指導稽古。平成二十二年時の練習生は十一人。平成二十四年度全日本剣道連盟少年剣道教育奨励賞受賞。（「第二十九号」〈二反田和則〉）

・那賀川剣道教室わかあゆ会（平島小学校体育館・山田耕司）

平成八年、大阪府警を退職して帰郷した山田耕司が、近所の保護者の要望を受ける形で開設、最初は子供三人から出発し、平成十八年一月の県小・中学校強化錬成大会小学生の部で初優勝する。以降毎年県下トップクラスの選手を育成し、会員数も県下で最も多くを数えるまでになった。平成三十年度全日本剣道連盟少年剣道教育奨励賞受賞。（「第三十五号」〈山田耕司〉）

・羽ノ浦少年剣道教室（羽ノ浦中学校武道館・加藤真悟）

昭和四十七年に開設され、山本忠蔵・竹治歳夫・尾崎行男のほか多くの指導者が羽ノ浦小学校体育館を道場として剣道を通じて青少年の健全育成に努めてきた。

代表指導者には、尾崎行男、濱田逸郎、平正明、森眞一が歴任し、平成二十六年度から加藤真悟が当たっている。平成二十五年度全日本剣道連盟少年剣道教育奨励賞受賞。「第三十一号」〈加藤真悟〉）

・徳島至誠館（徳島至誠館道場・中山繁輝）

平成三年阿南市羽ノ浦町宮倉に中山啓男、中山繁輝が開設。平成二十八年閉館。この間、館長中山啓男、副館長の中山繁輝のほか鎌田恵・河田清実・村井正志、曽根徳治など二十三名の指導者が稽古に関わり、卒業生は一三〇人に及んだ。県少年剣道錬成大会での優勝十四回を含め県内外の大会で計一八五回の優勝に導いたが、中山繁輝が教職を退職して都内に転居することになり、二十五年の歴史に幕を閉じることになった。その後再開の声が多く寄せられ、令和二年から中山繁輝を館長に活動を再開している。（「第三十三号」〈中山繁輝〉〈上田宏司〉）

・徳島剣清塾（阿南第一中学校武道館・河田清実）

平成三十年六月に開設、男女二十名の塾生が塾長河田清実のもとで稽古に励んでいる。

中学校の剣道

昭和六十年頃をピークに剣道人口が減りつつある中、中学校の県下大会参加チームは増えて、平成三年六月の選手権大会には過去最高の男子六十八校、女子四十三校が参加した。その後は次第に減少し、令和三年七月の県総合体育大会の参加校は男子三十六校、女子二十六校であった。

平成三年八月の県中学校総体で、那賀川中学校剣道部（顧問・斎浩市）が初の男女揃って優勝した。さらに八月佐賀県で開催さ

れた二十一回全国中学校選抜剣道大会で女子が準優勝、翌年福井県での二十二回大会では優勝に輝いた（「第八号」〈富田正、「第九号」平成四年度戦いの跡）。その後も那賀川中学校剣道部は、平成二十四年、令和四年の県総体で男女揃って優勝するなど県下の有力校として黄金時代を築いた。特に女子剣道部は、平成十九年、三十七回全国中学校剣道大会（山形県）では十五年振り二回目の全国優勝に輝くなど全国大会でも活躍をしている。

○武道授業へ指導者を派遣

平成十八年十二月改正教育法が公布施行され、平成二十四年度から中学校の体育で剣道など武道の授業が行われることになった。八十六校ある県下の中学校のうち、初年度には五五校が剣道を選択し、十四校に県剣道連盟から指導者を派遣した。（注⑭）阿南支部内では、阿南第二、那賀川、羽ノ浦の三中学校に派遣している。（「第二十九号」〈三木毅〉）

※注⑭　剣道授業に県剣道連盟から指導者を派遣した中学校（平成二十四年度）
城西・小松島・坂野・阿南第二・那賀川・羽ノ浦・市立川島・脇町・穴吹・山城・西祖谷・神山東・半田・貞光。なお、阿南第二中学校については女子のみが剣道を選択。

○部活動の指導

平成二十九年四月学校教育施行規則が一部改正され、中学校・高校の部活動において外部指導者が制度化され「学校職員」となった。教員の働き方改革の一環として採られた制度である。それまでは外部指導者には単独での指導や引率が認められていなかったが、学校長の監督下で、顧問に代わり単独で行うことができるようになった。

平成二十六年十二月二十九日の徳島新聞に、「羽ノ浦町中学校剣道部では、臼木崇（羽ノ浦町岩脇）が外部指導者として十年余り務めている。競技歴四十二年の教士七段で、来春全日本都道府県対抗優勝大会に県代表として出場する腕前を持つ。週一・二回、同校の武道場を訪れ、部員十一人に技術、礼儀作法もしっかり教え込む」と部活動の外部指導制度が紹介された。

生涯剣道

○社会人の剣道

阿南支部内では、小・中学生、高校・高専剣道部の指導稽古以外に、市立武道館、阿南第一中学校、大野小学校体育館、那賀川B＆G、羽ノ浦町体育館、徳島至誠館道場で週に二回程度、一般社会人の稽古が盛んに行われ、毎年十月に開催される徳島県社会人剣道大会に支部から複数チームが出場して、上位に入賞を果たしている。（注⑮）

※注⑮　平成に入って徳島県社会人剣道大会における阿南支部のチームの優勝
平成元年第十八回大会　阿南支部B（上田、中山、河田、北條、遠藤）、平成四年第二十一回大会　阿南支部A、平成七年第二十四回大会　徳島至誠館、平成八年第二十五回大会　阿南支部D、平成十一年二十八回大会　徳島至誠館（玉田・中山・村井・河田・木下）、平成十二年第二十九回大会　徳島至誠館（玉田・臼木・村井・河田・木下）、平成二十九年　阿南支部A（大石洋・大石真・敦賀・臼木・河田）

女子にあっても、富岡東高校OGを中心に稽古に参加しており、県女子剣道大会や全国青年大会に県代表で出場するなど活発な活動を展開している。

平成二十八年九月の全国郵政剣道大会において敦賀晋平（日本郵政）が個人戦で優勝、また団体戦にも四国チームの先鋒で出場して三位入賞に貢献。同年十一月第六十四回全日本剣道選手権大会では大石洋史（徳島文理中・高等学校教諭）が準々決勝に進出、ベスト八に輝いた。これは第三十三回大会で近藤亘が準優勝して以来の快挙であった。当時阿南支部長であった坂本信幸は、徳島の剣道第三十七号誌上でこの二名のほか、家事や仕事をこなしながら稽古に励み令和元年に六段に昇段した山崎沙織を、近年阿南支部で結果を残した者として名前を上げている。

○徳島県高齢剣友会の創立

昭和六十一年五月十五日、徳島市内において清原榮らが参集して徳島県高齢剣友会発起人会が開かれ、趣意書、規約などが協議された。五月十九日、城の内武道館で行われた発会式には、阿南支部の清原榮、磯部茂治、濱田逸郎ら県下から二十人が出席した。会長に竹原常雄、副会長に磯部茂治・久保勇、理事長には清原榮、副理事長に中川虎雄、事務局長には西野四郎ほか十名の理事を選出した。

「剣道の発展及び高齢者の生きがい、親睦、健康の増進」を会の目的とし、「各種大会、稽古会の開催、研修会及び県外大会等への参加、県剣道連盟行事への協力及び青少年の指導等」の活動を行うことが定められた。

（「第三十七号」〈高島稔之〉）令和四年三月現在一〇〇人を超える会員が「生涯剣道」をモットーに汗を流している。（注⑯）

※注⑯　平成三十年度徳島県高齢剣友会阿南支部会員

中山啓男、西岡侃、神原常経、福井軍二、北條憲治、坂本信幸、稲村慶祐、平正明、北條雄司、住友久夫、福井勝

○全国高齢者剣道大会での活躍

平成十五年十月、徳島で「第十六回全国健康福祉祭（ねんりんピック）」が開催され、剣道交流大会で、徳島Aチーム（先鋒・中尾正輝、次鋒・高島稔之、中堅・松村克隆、副将・坂下彦之、大将・中山啓男）が優勝の栄冠を手にした。（注⑰）

平成二十一年六月八日、日本武道館で開催された第三十一回全日本高齢者武道大会個人戦において、遠藤一美が剣道寿組（八十～八十四歳の部）で優勝した。全国高齢者大会での優勝は自身四度目となる快挙である。（注⑱）

※注⑰

中山　啓男　昭和五年二月二十八日～令和三年二月二十七日没　海部郡日和佐町北河内（現美波町）出身　教士七段

徳島外国語高校から松山外大英米語学校を卒業、二十四歳で英語教師となり、日和佐中学校在勤中の昭和三十八年八月、妻子を残して二年間米国に英語留学し、帰国後復職。昭和四十一年日和佐中学校に帰任し、以後九年間勤める。四十二年から平岡竹雄・張野久晴等から剣道の手解きを受け、三十七歳で剣道初段に合格。

昭和四十五年から剣道部顧問を務め、福井軍二・影山美雄の指導協力もあって、四十九年の県下大会で優勝、全国選手権大会ベスト八に導いた。昭和六十三年に七段に昇段。

平成二年三月、日和佐中学校校長を最後に勇退。平成三年阿南市羽ノ浦町に剣道場「徳島至誠館」を開設し、少年剣士の健全育成に尽力する。一方、平成三年度県高齢者大会個人C組（六十～六十四歳）で優勝。また、平成十五年、阿南市スポーツ総合センターで行われた「ねんりんピック」剣道交流大会でAチームの大将で出場し日本一に輝くなど、生涯剣道を生き甲斐として、高齢者剣友会の稽古や交流大会に積極的に参加した。

平成二十四年度全日本剣道連盟剣道有功賞受賞。（「第九号」〈平岡竹雄〉、「第二十九号」〈中山啓男〉）

※注⑱

遠藤　一美　大正十四年五月二日～平成三十年十二月六日没　阿南市下大野町出身　教士七段

昭和二十三年十二月六日、三年五か月のシベリア抑留を経て復員。二十八歳から剣道を習い始める。

昭和二十八年、片田勢一、清原榮らと大野武道同志会の創設に参画し、大野公民館で青年団の有賀秀敏、西岡侃らと稽古に励む。阿南第一中学校での指導稽古にも励む傍ら、清原榮らと大野小学校剣道部・阿南剣道教室・新野剣道教室を誕生させた。阿南剣道教室では、坂本信幸らを誘い、当時小学生の玉田晋作、桝山紹生、中西実らの指導稽古に汗を流した。

昭和五十七年四月から平成二年三月まで八年間阿南支部長を務め、事務局長北條憲治らと中堅指導者（後の青年部）の養成にも努めた。

昭和四十年から阿南市議を五期十七年、昭和五十八年から徳島県議会議員を六期二十四年務める。平成九年三月から二十三年まで県剣道連盟会長。平成二十四年旭日中綬章を授与される。

稽古熱心は老いを知らず、全日本高齢者武道大会において、平成七年A組で優勝、平成十三年特組で優勝、平成十七年寿B組（八十～八十四歳）で優勝、平成二十一年再度寿B組で優勝し、「生涯剣道」を実践した成果を示した。

平成二十七年度徳島県体育協会「生涯スポーツ賞」受賞。

（「第二十六号」〈高島稔之〉〈西岡侃〉〈北條憲治〉〈坂本信幸〉）

○おことわり

一　本稿は主に徳島県剣道連盟発行の「徳島の剣道」に掲載された記事を引用し、整理したものです。

一　人名の敬称は、原則として省略しました。

一　本稿では元号を用い、適宜西暦年を（　）内に記しました。

一　引用史料・文献で刊行されている著書・編書には「　」を、著者には〈　〉を付し、文末に（　）書きで記しました。但し、徳島県剣道連盟発行の「徳島の剣道」については号数のみを記しました。

一　「徳島県剣道連盟」については「県剣道連盟」と省略して表記しました。

阿南市武道館（2023. 1 .17撮影）

那賀川B＆G体育館（2023.1.17撮影）

徳島至誠館道場（2023.1.17撮影）

名西支部

徳島の剣道史編集委員　別宮憲治

序にかえて～石井町・神山町の沿革

徳島県剣道連盟名西支部は徳島市と吉野川市に挟まれた吉野川南岸域の石井町と鮎喰川上・中流域の神山町の二町からなる名西郡内の剣道愛好家（久保隆司支部長以下二十三名・令和四年四月二十五日現在）で構成されている。

明治以降の石井町の沿革を見てみると、明治二十二年（一八八九）市町村制施行によって発足した、石井村・城ノ内村・重松村・白鳥村・尼寺村・内谷村を区域とする「石井村」が、明治四十年に旧石井町になった。現在の石井町は、昭和三十年（一九五五）に旧石井町・浦庄村・高原村・藍畑村・高川原村の一町四村が合併して出来たものである。

神山町を見てみると、明治二十二年、広野・阿川両村が合併した「阿野村」、下分上山・左右内両村が合併した「下分上山村」の二村に、昭和三十年になって、神領村・鬼籠野村・上分上山村の三村を加えた五村が合併して神山町が誕生したものである。

なお、昭和三十年に大字入田が徳島市に、大字矢野が国府町に分割編入されるまでの入田村は名西郡に属していた。

一　藩政後期～竹刀打込稽古の普及

吉野川中流域の美馬郡・麻植郡を中心に蜂須賀氏筆頭家老稲田家の家臣（注①）が、また阿波郡を中心に「原士」と呼ばれた半農半士の在郷武士団が居住し（注②）、藩政時代を通じて武術修練が盛んな土地柄であったが、その風土は隣接する名西郡にも及んでいた。

※注①　「徳島の稲田家家臣人員とその居住地（一八七〇年稲田騒動時）」
美馬郡一七七六人、阿波郡六十七人、三好郡二十七人、麻植郡三二〇人、板野郡三十七人、名西郡二十二人、勝浦郡・那賀郡二十七人、徳島十一人、村名不明四〇八人、合計二六九五人
（これらの詳細な名簿は「阿波藩稲田家御家中と類親の系譜」国見慶英編纂、及び「稲田家御家中筋目書」猪井達雄編纂、第一巻～第五巻）

※注②　「原士」
二代藩主蜂須賀忠英の時代、慶安三年（一六五〇）、仕置家老長谷川伊豆の具申により阿波郡内の原野を与え、半農半士の在郷武士とし、多くは興崎、柿原などに居住させた。江戸末期、原士は阿波郡に三十九人、板野郡十一人、名西郡に四人、那賀郡に二人、美馬郡と麻植郡、徳島城下に各一人の計五十九人がいた。（令和四年四月二十四日　徳島新聞〈根津寿夫〉）

泰平の世になるにつれ、武士のたしなみとされた剣術は、実戦から「形」に変わっていったが、藩政時代後期に、面、籠手（小手）、胴が考案され、防具を着けた「竹刀打込稽古」が行われるようになる（注③）と、他流試合の禁止が解かれ、師家を越えた

家中相互の試合稽古が日常化する。やがて他家との廻国修業が活発となり、竹刀打込稽古は地方の豪商や富農層の間にも広がりを見せた。吉野川中流域の藍の豪商や富農の中には、財力にものをいわせて道場を開き、他国の武芸者の来訪を歓迎して腕を磨く者もあらわれた。

※注③「剣術稽古防具の考案」

正徳年間（一七一一～一七一五）に直心影流の長沼司郎左衛門国郷が、剣道具を開発し、竹刀で打突し合う「打込稽古法」を始めた。

宝暦十三年（一七六三）に中西派一刀流中西忠蔵子武が鉄面をつけ現代の剣術の防具の胴の原型になった胸当てを用いての「打込稽古法」を採用すると、またたく間に多くの流派に波及した。（「剣道の歴史」全日本剣道連盟）

寛政元年（一七八九）、武芸を奨励した老中松平定信は各藩に武芸指南者の調査を命じているが、その調査回答書控えである蜂須賀家文書「武芸指南仕面々並芸方名目伝来書」によると、徳島藩では剣術に関しては十四流派五十六人を挙げて報告している（注④）。その中に、原士では、伯耆流に小出宅右衛門・四宮叶治、大窪新作、貫心流に七条弥藤治の名が見える。

（「第十三号」〈坂本裕二〉）

※注④「「寛政元年　蜂須賀家文書」（徳島藩が報告した十四流派五十六人の剣術流派別の指南者数）

関口流九名、圓一流二名、伯耆流三名、直指流二名、貫心流十八名、新影流四名、浅山一伝流四名、心形刀流三名、頭軍流三名、丹石流一名、南派流一名、田宮流二名、無尽流三名、天真流一名。

美馬市脇町に稲田家家臣武田家が経営する「神全塾」という学問と武芸の塾があった。同家に残る「武術御執行被成候御方御尋被降候姓名帳」には、文政七年（一八二四）から嘉永三年（一八五〇）までの間に神全塾に立ち寄って稽古をした東北から九州までの武芸者四十四人の姓名と流派が記されている。（「徳島市史第六巻」徳島市・令和二年三月一日発行）

また、武田家には、神全塾を訪れた武芸者が持参した英名録を武田宗作（一七六六～一八三四）が筆写したものが二通残されている。その一には、文政十三年（一八三〇）二月、岡山藩小野派一刀流師範笹谷武次郎の門人津島兵左衛門が、徳島城下に来て試合をした後、十四日・十五日には、名西郡下浦の神道無念流一宮琢磨の道場で門人美馬大蔵以下十八名と、十六日には名西郡関の山根大蔵の道場で、門人十七名と試合をしたことが記録されている。

その二は、江戸小川町住神道無念流一宮琢磨門人、真田俊之輔正之の英名録「諸流撃剣出合」で、その記録によると、天保二年（一八三一）十月六日徳島城下に来て神道無念流三宅繁左衛門の門人と試合をした真田は、十月八日、名西郡関の貫心流山根大蔵の道場で門人山根武五郎以下六名と試合をしている。真田は阿波の国に十五日間滞在し、名西郡関の山根道場で試合の後、西麻植・川島、美馬郡棚田村などの道場を訪れている。（「第十二号」文化・文政期の阿波に於ける剣術他流試合について〈坂本裕二〉）

麻植郡麻植塚(現吉野川市)の組頭庄屋の佐藤家が、麻植塚村と那賀郡富岡町(現阿南市)に貫心流剣術の道場を開いており、同家に残る「起請文前書之事(門弟書上)・徳島県立文書館蔵」には江戸時代中期から明治時代後期にかけて一二〇〇人余の門弟が記されているが、入門者数は一七〇六～一八二〇年（一一四年間）に二五六名であったものが、一八二五～一八六五（四十年間）には九七五名と藩政末にかけて急増している。（徳島県立文書館第二十六回企画展「阿波武道の広がり」）これは、次第に外国船の出没が頻繁になったことを受け、文政八年（一八二五）に幕府から異国船打払令が出され、藩でも、文久三年（一八六五）村々の富農層を中心に二十人を一組とする「農兵の組織化」について布達するなど、西洋列強への危機感がその背景にあったものと考えられる。民衆の力を軍事力として利用する必要に迫られた藩では、「剣術は各人が師匠に就いて家業の合間に稽古し、月に一・二度農業の合間に最寄りの神社などへ寄り合い、打込み稽古をやらせるべきこと」として、猟師に対する砲術の稽古のほか農民に対しても剣術の稽古などの軍事訓練を督励している。（「徳島市史第六巻」令和二年三月一日　徳島市発行）

幕末の剣術が士分のみならず豪商や富農から一般農民にまで広がりを見せるようになったことは、嘉永二年（一八四九）、三好郡東みよし町三加茂の旧村社八幡神社に奉納された直指流の武道額からも窺うことができる。同額には後の藩校長久館の頭取淺野辰太郎尚明（淺野幸尚の父）の門人十八名中、町人・庄屋・組入百姓など士分以外の者十二名が名前を連ねている（注⑤）。

※注⑤　「三好郡三加茂八幡神社の武道額」

東みよし町三加茂中庄の旧村社八幡神社の拝殿内に、願主井口長次郎により奉納された「直指流の武道額」が掲げられている。嘉永二年(一八四九)に奉納された同額には、淺野辰太郎の門人十八名が墨書されている。この十八名の「身居」を調べてみると、

頭入百姓：山本源兵衛、川原清兵衛、木藤兵衛、山下安右衛門、頭入庄屋二男武重権次郎、同三男武重富太郎、頭入庄屋：武重富三郎、頭入五人組：国安太郎兵衛、頭入奉公人：髙橋左満津、髙橋森蔵、御蔵百姓：田中弁助、国安善兵衛、来り人：林徳蔵（薬種業）、伊澤玄由（医師、私塾経営）、郷付浪人：田中岩太郎、稲田家家中：庄右右衛門三男島田岩喜知、池田大隈家来：曽我部多三郎　以上十八名

池田士二百五十石井口辰次兵衛二男井口鹿之助、同長男長左衛門、同三男保次郎、同四男吉太郎、　以上井口家四名

（「第二十一号」〈坂本裕二〉）

名西郡内における江戸時代の剣術に関して詳細なことは分からない。しかし、幕末の名西郡には下浦の神道無念流一宮琢磨、関の貫心流山根大蔵、浦庄には柳生神影流近久鹿之丞が開く道場があって、士分に留まらず近隣の富農や上層農民を門下生として剣術の稽古が盛んに行われていたことは間違いない。

一宮琢磨には県下に相当数の門下生がいたものと思われるが、別流派の佐藤忠左衛門の貫心流や浦庄村の近久鹿之丞の神影流などに押されてか、神道無念流の弟子たちの活躍は全く見られない。

対照的に貫心流の佐藤忠左衛門は、麻植郡鴨島町牛島村に道場を開き、山口作十郎・山根大蔵・山根武五郎・山根正雄・近江佐久郎へと続く多くの逸材を輩出し、大正初期まで続く貫心流の一大道統を築いている。（「第十五号」〈坂本裕二〉）

また、神影流の近久鹿之丞に師事した久保利雄は、浦庄に久武館を創設し、門下に石井隆介、須見善富、田村堅一、藤川五郎などの逸材を輩出して、名西郡内に留まらず徳島県の剣道界を牽引した。

二　明治期～武徳会の創立と撃剣の再興

明治維新により西洋軍制が導入され、剣術道場は衰退の憂き目に遇い、剣術指南を生業とする剣士らは苦境に立たされた。しかし明治十年（一八七七）西南の役後の明治十二年には警視庁で撃剣世話掛を設けて巡査の撃剣稽古を奨励するようになるなど、撃剣は徐々に復興の兆しを見せた（注⑥）。

※注⑥　「撃剣興業」

明治四年（一八七一）廃藩置県により生活に困窮した武術家を救済するため、榊原鍵吉によって撃剣が興業として組織され「撃剣会」として明治六年、浅草で実施され大人気となった。その後多くの武術家も興業を願い出て、撃剣会は各地で開催されたが明治十年代後半に姿を消した。

明治十八年四月三日出版の「徳島県阿波国市郷壱般撃剣英名録」に、町村名を冠して剣士の氏名四五三名が番付表に列挙されている。流派間の交流試合が想定されるが、県内で撃剣興業が行われたという史料は見当たらない。

明治十九年、徳島警察署内に巡査教習所を設置して二ヶ月間の採用時教養を実施していたが、明治二十二年六月六日、徳島県巡査教習所規則が改訂され、教習所で教える学科に「撃剣柔術捕縄使が加えられた。（「徳島県警察史」徳島県警察本部・昭和四十年三月二十日）

日清戦争（一八九四―一八九五）を経験したことで国民の間に尚武の気風が醸成され、明治二十八年「大日本武徳会」の創設によってさらに武術再興が進んだ。

武徳会は警察を中心として、内務省の地方組織を活用する形で全国的に組織結成が図られた。会員から会費（義金）を募ることでその運営を行い、会員数が目標に達した地域から順次支部を設置していった（注⑦）。

※注⑦「武徳会会員の募集、財政基盤」

明治二十八年（一八九五）四月十七日に発足した大日本武徳会は、同年七月二日会員募集と財政基盤確立のため次の方針を決定した。

・知事を地方委員長に府県高等官を幹事に町村長その他有志を委員に委嘱すること。

・全戸数の十五分の一を会員に募り、十分の二を正会員に、十分の八は賛助会員を目安にすること。入会申込みは郡役所又は警察署で取りまとめること。

・警察官及び軍人軍属については全収入の二割を義金として割り当てること。

・正会員は入会義金一円以上とし、賛助会員は同十銭以上とする。会員は一回の入会義金の納付によって終身その資格が存続する（死亡後も相続者に委譲できる）。（「大日本武徳会の成立過程と構造」〈坂上康博〉）

支部の設置は「義金寄付金合わせて二千円に達した場合で総裁宮殿下が承認した場合」とされ、明治二十九年十二月富山県に全国初の支部が設置された。

徳島県では、地方委員長の県知事をトップに、警察部長を副委員長として、警察署が中心になり、山根正雄（阿波郡久勝村、山根道場）・淺野幸尚（徳島市、淺野道場主）・中川義則（徳島市、義揚館主）・梶浦四方（美馬郡拝原村、龍遊館主）・佐伯國助（海部郡鞆奥村、武揚館主）ら武徳会から地方委員に委嘱された武術家らと連携して支部創立に奔走した。大島半作の財政的支援（注⑧）などを得て、明治三十一年十二月六日、全国で第六番目となる県支部が設置された。翌三十二年二月二十六日発会式に合わせて挙行された剣槍大会に名西支所からは会員六十四名の剣士が試合に臨んだ。（「明治三十二年二月二十六日大日本武徳会徳島支部開會式剣槍組合」）（注⑨）

※注⑧

大島　半作　天保二年生まれ～明治四十三年八月八日没

阿波郡香美村字藤太夫須賀（現市場町善入寺島）で、原士目付で心形刀流佐藤五郎兵衛篤信の二男に生まれ、文久二年（一八六二）大島嘉兵衛の養子になった。大島家は麻植・阿波両郡に百余町歩の田畑を有する藍の豪農で、徳島市船場に九州・四国に販路を持つ支店を構えるとともに、酒造業を営む県下屈指の豪商であった。

半作は幼少の頃より父から剣術の手解きを受け、長じて江戸に出て伊庭道場に入門、安政三年（一八五六）印可を許された心形刀流の達人である。支部設立に当たり半作はその組織作りに関与して日夜奔走し、最も困難であった基本財産作りに率先して厖大な自己資産を投じ同志と共に財産を確保した。（「第九号」〈坂本裕二〉）

※注⑨「武徳会徳島支部開会式剣槍大会への名西支所出場者」

笹川俊吾・古川甚作・片岡力蔵・宮生三郎・安藝仁平・長尾官一・楠政重郎・岩野儀平・谷沼三郎・東條兵次・桂収之助・市川重太郎・梯宇三郎・佐藤為次郎・正木周助・宮地三郎・佐藤官太郎・下山才二・藤井精逸・多田半次郎・瀬川順一・和田仁平・黒田市太郎・中川徳平・原佐平・川上次郎太・黒田嘉太郎・松家昇次・澤村千賀蔵・畑宗太郎・桑原石五郎・小原■蔵・佐藤蔵五郎・後藤万蔵・長尾裕十郎・稲木丈平・野口伊六・板東芳五郎・新開利三郎・今柴長一・市川鶴蔵・居内荒市・野田八左衛門・堂本亀太郎・櫻間兵兵衛・廣野常次郎・舟戸勘五郎・居内猪之吉・白石中一・市原秀太郎・平田嘉之次・小出光造・平田直右衛門・松島一平・廣澤惣七・稲井柳蔵・吉永達郎・三木榮次郎・吉永勘平・長尾助十郎・山本三太・佐藤幸一・佐藤兵八郎（「明治三十二年二月二十六日大日本武徳会徳島支部開會会式剣槍組合」より抜粋）

支部長に県知事、副支部長に警察部長が就任し、各郡に設置されていた警察署にその支所を設け、警察署長が支所長として会の運営にあたり、引き続き会員の勧誘に努めた結果、明治三十五年四月時点で会員数一一〇七八人を数えている。（「大日本武徳会の成立過程と構造」〈坂上康博〉）

事務所を富田浜の県公会堂内におき、県支部の道場は徳島城趾内の滴翠閣を充て、剣術・柔術。弓術など武術の稽古に励むことにした。

当時の新聞記事などから発足時の常議員に剣術家からは、大島半作、井後哲五郎、宮田熊蔵、梶浦四方、山根正雄らが、三十八年には久保利雄が就いたことが窺えるが、支部組織の実態は明らかではない。（注⑩）

※注⑩「武徳会県支部の組織」

茨城県では、常議員として、剣術家三名と、参事官・憲兵少佐・監獄署典獄の六名、幹事に郡長（支所長）九名、剣術家四名、槍術家一名の十名で支部役員が構成されている。（「大日本武徳会の成立過程と構造」〈坂上康博〉）

創立当時の武徳会支部は、大日本武徳会が当面の事業目標としていた武徳殿の造営（会員の拡充による造営資金の調達）と演武大会の開催（県代表選手の選考・派遣）に県支部として協力することに注力した。撃剣の錬成は警察、監獄の道場や各地の剣術道場で行われ、折に付け交流試合も開催されたが、武徳会県支部が武道の錬成団体としてその中心的位置を占めるようになるのには、しばらくの時間を要したようである。

武徳会徳島支部の創立に合わせ名西警察署(後の石井警察署)に名西支所が置かれた。尚武の気運の高まりは、郡部にまで及んで、名西郡内では、浦庄村の神影流近久鹿之丞や高原村の貫心流宮田熊蔵（注⑪）の道場では若者たちの元気なかけ声が響いていたものと思われるが具体的なことはよく分からない。

石井町史は、「明治時代初期の剣術家では高原町出身の山根正雄が県下剣道界の雄であったようだ。明治天皇の御前試合に出場したり、大阪朝日新聞の「帝国剣道名士二十人」に名を連ねたほどの達人であった」として山根正雄の経歴を掲載している。また町内の著名な剣術家として、浦庄村国実生まれの戸田流剣術指南武市増二（天保五～明治三十六年）、高原村生まれの貫心流宮田熊蔵(天保七～大正五年)、板野郡住吉村生まれで高原村の明石家に入った関口流免許皆伝の明石幾太郎（慶応二～昭和十九年）の名前を挙げている。

山根正雄については「第七号」に詳しく紹介されている。

山根　正雄　天保十一年十一月三日～大正十四年三月九日没

山根正雄（戸籍名政雄）は名西郡高原村関(現石井町)で、山根武五郎の長男として生まれ、年少の頃から父武五郎の薫陶を受け剣術の腕を磨いた。

寛政四年（一八五七）一月十七歳の時、父の許しを得て武者修業に出る。先ず芸州広島で藩の貫心流剣術指南細六郎義知(阿波出身)の下で一年間修業し、安政五年(一八五八)正月から、文久元年（一八六一）夏二十一歳までの三年間、周防国岩国、徳山、備中備前から、四国各国の有名な道場でその技を磨いて帰郷した。その間周防国の貫心流宗家宍戸家を訪ねて直接その教えを受けた。その後郷土で稲田家家臣や地元の青少年に剣の道を教える傍ら、京阪各地や江戸に出て修業に励んだ。北辰一刀流の千葉周作の道場へも訪れている。（千葉道場では千葉周作と手合わせして籠手一本をとったこともあるという。「石井町史」）

阿波郡久勝村川人春次二女こうを娶り、居を妻の実家に移し

て道場を開いて子弟を教えた。慶応三年（一八六七）には稲田家家臣として京都御所の警備に従事、さらに明治元年（一八六八）稲田家が東征総督有栖川宮熾仁親王守護に当たることになり、これに従軍した。帰任後は、専ら久勝村の道場で後進の指導に当たった。

その後、居を徳島市に移した。明治二十八年、大日本武徳会が創立されると地方委員を委嘱され、徳島市の大島半作、淺野幸尚、中川義則らと徳島支部創立に尽力し、支部が創立されると支部常議員に推された。

明治三十五年大日本武徳会三等有功章を授与され、徳島支部教授となり、徳島県立徳島中学校、徳島師範学校剣道教師としても生徒たちの指導に当たった。

明治四十一年五月教士の称号を受け、明治四十五年皇居で御前試合が催されたとき、正雄は指定選士に選ばれ出場の栄に浴した。後全国名人二十人の一人に指名された。

大正十一年（一九二二）九月十七日、八十一歳の時武徳会より剣道最高位の範士の称号を与えられ、名実ともに徳島県剣道界の第一人者となった。

大正十四年徳島市富田五番町の仮寓でその輝かしい生涯を終えた。享年八十五歳。徳島県剣道界の基礎は山根正雄によって築かれ、阿波郡出身の近江佐久郎がこれを継承した。（注⑫）（「第七号」〈坂本裕二〉）

ちなみに武徳会徳島支部剣道研究会創立の立役者となった山家雪蔵も山根正雄の門弟である。（「徳島剣道三十年の歩み」県剣道連盟　昭和五十八年）

※注⑪

宮田熊蔵蕃俊　天保五年四月～大正五年二月二十四日没

宮田蕃俊、通称熊蔵、高原村に生まれる。山根大蔵（正雄の実父）について貫心流、弓箭流薙刀を学び、嘉永二年両技の目録一巻を得る。嘉永三年より諸国遊歴試合をなし、同年十月江戸に出、貫心流外山勝五郎に師事、允可皆伝を受ける、帰郷後宮田流道場を開き、遠鳴城と号す。讃岐高松、和泉堺にも道場をもち、伏見の戦い後帰国、明治三十年武徳会徳島支部常議員、徳島支部教授及び、徳島師範学校教授となる。（「遠鳴城」〈宮田栄男〉）

※注⑫

近江佐久郎　明治三年二月二十七日～昭和十九年六月四日没

阿波郡香美村(現阿波市市場町)に生まれる。山根正雄について貫心流剣術を学ぶ。佐久郎十六歳の時、師の勧めにより中国方面への武者修業に旅立つ。明治二十一年三月、帰郷、山根正雄から貫心流免許「目録」を授けられる。同二十四年徳島県巡査を拝命後、奈良県へ転出、奈良県巡査教習所の剣道教師となる。のち徳島刑務所・徳島武徳会の師範となる。明治四十年、徳島県師範学校の剣道教師、大正元年（一九一二）県立徳島中学校助教諭、大正十二年には教員検定に合格して教諭となったが、昭和六年（一九三一）退職。昭和十四年七月七日剣道範士号を授与される。（「第六号」〈坂本裕二〉）

三　大正・昭和前期～武徳会徳島支部剣道研究会の創設

剣術から「剣道」へ

武徳の涵養と武道の奨励をすすめる大日本武徳会は、明治三十五年（一九〇二）「範士」・「教士」の称号を定め、大正三年（一九一四）「剣道範士」「剣道教士」の表記を明文化し、同八年には「武術」を「武道」の名称に改称して統一した。

また、剣術の流派を統一した「剣道」の普及を図るため、大正元年十月、太刀の形七本、小太刀の形三本の計十本で構成される「大日本帝国剣道形」を制定した。

武徳会徳島支部剣道部では、時代の流れに対応し、大正九年、県下の剣道有段者で組織する徳島県剣道研究会を設立した。これは山家雪蔵が同志と計り設立したもので、名誉会長近江佐久郎、会長に吉本彦吉を推し、事務会計に山家雪蔵が当たり、武徳会支部の剣道教師連は勿論全県下の有段剣士を網羅して県下唯一の剣道錬成団体として出発したのである。

最初は初段以上の三十八名の少数会員であったが、次第に発展して元に数倍する会員を擁し、昭和前期の県下剣道界を牽引する存在として、徳島県剣道の振興発展に大きく寄与した。

（阿波郷土史会報「ふるさと阿波・八十五終戦前後の剣道史」〈井上常之進〉）

久武館道場の開設

この時期に、石井町にあって県下剣道界で揺るぎない地位を占めていたのが、明治三十八年に柳生神影流久保利雄(注⑬)が開いた久武館である。久保利雄の門下生には後年徳島剣道界に大きな功績を残した石井隆介（石井町石井）、須見善冨(藍畑西覚円)、田村堅一(石井字城の内)、藤川五郎(徳島市一宮町）らがいる。

明治四十五年から大正十三年の間、館長久保利雄は九州宮崎に出て久武館を留守にしている。この間留守を預かっていたのが久保利雄の義兄（久保利雄の姉・サキの夫で、久保利雄の妻・キヌの兄）吉永勘平である。吉永勘平は善入寺島にあった心形刀流佐藤道場の師範を務めていたが、大正四年(一九一五)島内住民の強制移住を機に久武館道場で指導を行っていたもので、第二代館長久保義八郎も吉永から心形刀流を習っている。（久武館道場ＨＰ）

※注⑬

久保　利雄　慶応三年二月五日～昭和八年五月十九日没

久保利雄は、石井町浦庄字国実に生まれる。父は六十郎、母は地紙氏。剣術を近久鹿之丞利光に学ぶ。明治二十二年柳生神影流免許巻を授けられる。のち各府県を巡遊して錬磨に努め、同二十七～三十七年に至る間、佐賀、福岡に武道場を開設すること十五ケ所といわれる。

明治二十八年、大日本武徳会が発足すると特別会員に列し全国演武会十五人抜きの離れ技を演じ、剣の天才と称された。

明治三十八年帰郷して久武館を創立、近久家より斯流の皆伝を受ける。明治四十年、徳島県立農業学校剣道教師を嘱され、同年武徳会より剣道精錬証を受ける。同四十五年招かれて宮崎県立都城中学校嘱託剣道教師、歩兵連隊将校団・宮崎県青少年団を指導する。大正十一年剣道教士に推される。同十二年文部省より中学校教員免許が授与され、都城中学校教諭に任じられる。大正十三年宮崎より帰郷、徳島高等工業学校武道教授となり、武徳会徳島支部

名誉教授を嘱せられ後進の指導に努める。

（「石井町史」平成二年　石井町、「第三号」〈久保利雄先生墓誌〉）

学校剣道

明治二十七年（一八八四）一月には文部省通牒によって、学校の課外における武術指導に対して公費が支給されるようになっていた（「大日本武徳会の成立過程と構造」〈坂上康博〉）が、明治四十四年には心身の錬磨を目的に撃剣及び柔術が中学校の正科となった。大正十五年（一九二六）に、「撃剣及び柔術」は「剣道及び柔道」に名称変更され、昭和六年（一九三一）「師範学校規定」、「中学校令施行規則」が改正されて、剣道・柔道が正科必修科目になり、武道(剣道・柔道)は体育とは別に全学年を通じ時間割に組んで実施された。特に寒稽古と称し平常授業前一時間位、一、二週間全校生徒で実施されていた。（「阿波郷土史会報・ふるさと阿波八十五終戦前後の剣道史」〈井上常之進〉）

久保利雄門下の石井隆介（注⑭）は麻植中学校で、須見善富（注⑮）は脇町中学校でそれぞれ剣道の指導にあたり、各中学校剣道部の礎を築いている。

旧麻植中学校で石井隆介の薫陶を受け、その後県下の剣道界を牽引した門弟には、重井好髙・髙下正義、美馬政雄、坂本祐二、阿部全司、乾寿夫、野口直之等がいる。

※注⑭

石井　隆介　明治二十一年二月十四日～昭和四十八年一月二十五日没

石井町石井に生まれる。久保利雄門下生として剣道に励む。大正十四年精錬証を受け、県立麻植中学校に勤務するようになり、麻植中剣道の礎を確立した。昭和十四年教士号を受け、同年六段に進んだ。徳島県剣道連盟理事長、また同審議員として永年県剣道界の発展に努めた。昭和三十二年七段、同四十七年五月八日に範士の称号を授与された（「徳島剣道三十年の歩み」県剣道連盟　昭和五十八年）（「第四号」わが郷土の剣豪〈名西支部〉）。ちなみに石井克太郎は隆介の長男である。

※注⑮

須見　善冨　明治二十六年三月二十七日～昭和四十三年五月六日没

藍畑村字西覚円の農家に生まれる。久保利雄門下生として剣道錬磨に励み、大正五年一月二十三歳の若さで柳生神影流免許を伝授された。大正十三年県立徳島中学校嘱託となり、同十四年年県立脇町中学校教諭となる。以来同校で在職二十三年間に及び脇中剣道の基礎を確立、県下に覇をとなえる黄金時代を築いた。昭和十一年教士、同十四年県支部教授、昭和十五年居合道無双直伝英信流山内豊健に入門。昭和二十年脇町中学校を退職。

戦後自宅に雄心館道場を開設。青少年のための剣道振興に努めた。昭和二十四年県剣道連盟が発足すると顧問となり、昭和三十年剣道連盟副会長に就任、全日本剣道連盟評議員、三十三年同理事に選任される。昭和三十七年五月十日剣道八段、四十年三月一日剣道範士、同年五月五日居合道範士号が授与された。

昭和五十二年十一月、県立脇町高等学校でかつて教導を受けた門弟たちによって顕彰碑が建立された。

（「徳島剣道三十年の歩み」県剣道連盟　昭和五十八年）（「第5号」剣道、居合道範士　須見吉富先生〈名西支部〉）

青年団における剣道の実施

明治の初期に各地に自然発生的に結成された「青年団」は、近世からの伝統的な地域青年組織である若者組などが近代的に模様替えしたものであった。

日露戦争（一九〇四－一九〇五）後、明治政府も青年団活動の国家的意義を認識するようになり、明治三十八年（一九〇五）内務省地方局長通牒「青年団体向上発達ニ関スル件」により青年団は公民教育のための修養団体として位置づけられた。青年団事業の中で最も大きなものは義務教育を終えた年齢の者に対する補習教育であったが、体力増進のためにも撃剣・柔道・相撲などの武術が推奨された。

さらに大正四年（一九一五）、内務省・文部省の両省共同で青年団体に関する訓令が出され、①青年団の最高年齢は二十歳（大正九年に二十五歳に修正）、②設置区域は市町村単位、③指導者は小学校長あるいは名望ある者、④運営費は団体の負担、というように青年団組織について具体的な基準を定めている。

大正九年の文部省報告によると、全国で最も多くの青年団で実施していた運動競技は剣道（撃剣）で、二番目相撲、続いて各種競争、体操、柔道という順になっている。（「全国青年団の訓練と体育」文部省普通学務局、一九二〇）。

名西郡内では石井・神山・入田の各地区全ての青年団（注⑯）が撃剣、柔道、相撲を実施種目に挙げている。

※注⑯　「名西郡の青年会」

石井町青年会、高川原村巳西青年会、藍畑青年会、高原村青年会、高志村青年会、浦庄村巳西青年会、浦庄村自疆青年会、浦庄村下浦青年会、入田村青年会、阿野村廣野青年会、阿野村阿川青年会、鬼籠野村青年会、神領村青年会、下分上山町進取会、下分上山町中央青年会、下分上山町東雲青年会、上分上山町青年会

（「戦前・青年団における剣道の実施状況について」平成二十九・三十年度全日本剣道連盟広報・資料小委員会（西日本）報告書）

大澤善二郎著「西岡信太伝」には木頭地区の青年会活動の剣道について次のように紹介されている。「八十歳前後の老人の青年時代すなわち明治の終わりから大正時代では、青年会には義務のように入会すると剣道をせんならんようになった。会の事業として杉林の下刈り、苗木の運搬などで収入を得、これで防具、竹刀を求めるなど努力した。各部落ごとのお宮の舞台、神社や阿弥陀堂の庭、或いは学校の教室を借り、ランプや焚き火の明かりで稽古した」。（「木頭剣道の始まり前夜」〈三木毅〉）

同じ山間部である神山地区でも、木頭地区と同じような活動が行われている。

大正七年六月、阿野村では高橋伝吉らが「広野尚武団」を創設し、四十九名が入団した。道場は一宮衛守宅を借り受け、撃剣講師は同郡浦庄村の久保利雄、柔道講師には徳島市蔵本町の森本千吉を招いて夏期講習を開いた（注、久保利雄が九州から帰郷するのは大正十三年である）。稽古は主に夜間に行われ、安井楼を講師の宿泊所にあてた。これらの経費については、団員が樫本製材

所（字河口）より阿野村是製糸所（字五反地）へ製材屑を運搬して得た約三十円余が充てられた。こうした努力の結果、名西郡聯合運動会における武道優勝旗は毎回広野青年団が獲得したという。（「阿野村誌」昭和三十三年）

四　第二次世界大戦後～スポーツから人間形成の道へ

名西支部の誕生

第二次世界大戦の終結に当たり、占領政策上好ましからずとの理由で、剣道は全面的に禁止され武徳会も解散させられた。やがてシナイ競技として再開されると、石井町浦庄の久武館道場（館長久保勇）では、須見善富、石井隆介師範のもとに、高瀬嘉十郎、高橋静夫、藤本福雄らをはじめ、石川、小泉、黒住、福富、遠藤（英）、松島らが参集し、概ね三十一年頃まで週三回の稽古を実施して、剣の道の伝統が守られた。

昭和二十四年（一九四九）十月に徳島県体育剣道クラブ（会長尾形郷一）が発足すると、この発足会議に参加していた石井隆介を支部長にして名西支部が誕生した。翌二十五年に徳島県体育剣道クラブが徳島県剣道連盟に改称されると、同時に名西支部の名称も剣道連盟名西支部に変更して、初代支部長に高橋静夫を選任した。（注⑰）

昭和二十六年、板野支部主催の講和記念県下大会が開催されたのを皮切りに、翌二十七年一月に県剣道連盟主催の第二回大会、同年二月勝浦支部主催、同年三月に鳴板支部主催、そして十二月には名西支部の主催で県下大会を開催した。

※注⑰　名西支部歴代支部長

髙橋	静夫	昭和二十五年四月～昭和三十四年三月
久保	勇	昭和三十四年四月～昭和三十八年三月
松島	隆	昭和三十八年四月～昭和四十二年三月
多田	三美	昭和四十二年四月～昭和四十四年三月
遠藤	清一	昭和四十四年四月～昭和五十四年三月
重井	好髙	昭和五十四年四月～昭和五十九年三月
阿部	全司	昭和五十九年四月～平成九年三月
大西	政範	平成九年四月～令和二年三月
久保	隆司	令和三年四月～現在（令和五年一月）

雄心館道場

昭和二十八年、須見善富が石井町藍畑の自宅建物を改築して雄心館道場を開設した。初めは居合の稽古が中心であったが、剣道の稽古も併せ行うようになって、板野郡から近藤阿佐一、田村楚一、麻植郡からは平尾勝美、郡内では松島隆、中村武次、多田三美、遠藤英雄、次いで美馬政雄、高下正義らが道場で汗を流した。

昭和四十二年までは、雄心館道場の初稽古(一月二日)には県下各地から剣客が参集する盛況さを呈した。また至誠寒泉会(旧麻植中剣道部卒業生)との初稽古（一月三日）も続けられ、昭和四十六年からは、名西支部と至誠寒泉会との共催で阿北地区剣道大会を開催している。（「徳島県剣道三十年歩み」県剣道連盟　昭

和五十八年）

学校剣道の復活

戦後しばらく禁止されていた剣道は撓競技として復活し、昭和三十年（一九五五）頃には学校においてもクラブ活動で実施できるようになり、さらに三十八年には教育課程の改訂により、高等学校では正課の中に体育三単位中一単位は格技（柔道・剣道・相撲）の内どれか一種目取り入れなければならないことになった。（「第二十三号」〈髙下正義〉）

昭和三十一年には、旧師範学校及び徳島大学学芸学部の卒業生などで「渭水剣友会」が結成され、毎月一回以上徳島大学学芸学部体育館で剣道の稽古を行った。会長に石丸米蔵、副会長に尾形郷一・藤川五郎を選んで県下教育者剣士の結束を固め、県下剣道の復興発展に努めた。同会名西郡理事に石井克太郎が選ばれている。（「阿波郷土史会報・ふるさと阿波八十六終戦前後の剣道史（中）」〈井上常之進〉）

『昭和三十四年四月鴨島第一中学校から名西高等学校に転勤した乾壽夫は、同校に十六年間在籍中、高瀬嘉十郎とともに剣道部を指導して県下の強豪校に育てあげている。（「第二十一号」〈中村稔裕〉）

平成二十八年度全日本剣道連盟剣道有功賞を受賞した中村稔裕は、撓競技として復活した当時の中学校・高等学校時代の剣道を次の通り振り返っている。

「昭和三十一年四月、高浦中学校二年生の折に剣道部が発足し、一期生として十九名が入部。剣道具、剣道場無し。顧問は髙橋静夫先生。剣道具一式の値段はサラリーマン給料の一ヶ月分もした。部員のうち九名が剣道具を購入してもらえたが、十名が購入できずに退部。校庭で運動靴を履いての稽古が始まる。その後、地元の久武館道場の久保勇館長の御配慮により道場をお借りしての部活となる。久保、髙橋両先生の指導の他、国語・体育・英語・美術・音楽の先生方も加わり厳しく鍛えられた。

中学二年の秋、県下大会に名西郡代表で出場、当時、中・高校生には剣道大会が認められておらず、「撓競技」。服装は白の体操服上下、道具はフェンシングそのもの。竹刀は全長の先から三分の一が三十二本、次の三分の一が十六本、次の三分の一が八本に割られ、刃部には革の袋が被せてある袋竹刀であった。試合は三本勝負ではなく一定の時間内に有効打突の多い少ないで勝負を決めていた。

中学三年になった昭和三十二年五月二十日付文部次官通知により、「撓競技」と剣道の内容を整理統合し、名称が「学校剣道」として統一され、中学生以上の大会が剣道大会となり、「撓競技」は姿を消した。

高校は県下ベスト四以内の実力校名西高校に進学。指導者は高瀬嘉十郎先生、乾壽夫先生のほかに、名西支部の重鎮石井隆介・須見善富両範士をはじめ松島隆・遠藤英雄・久保勇・野口直之などの先生方の指導を受けた。

高瀬先生は日本体育学校（現日本体育大学）の出身、乾先生は

陸士出身で共に恐ろしいほどの気迫だった。高二、高三と県下大会を完全制覇することで先生方にご恩返しが出来た。』（「第三十三号」〈中村稔裕〉）

昭和三十八年、神山町体協主催で第一回武道大会が開かれ、徳農本校・名西高校・川島高校・神山分校、中学校は石井中・高浦中・入田中・北井上中等が出場して盛大に行われた。前半十年間は高校と中学校、後半二十年間は中学校と少年で三十回まで行われたが、生徒の減少により幕を閉じた。

昭和三十四年徳農神山分校に赴任した高下正義は、昭和四十年から約十年間同校剣道部の指導に尽力し、松村和宏・久保隆司・東徳美・馬岡聡（警視庁）等の卒業生が現在七段に昇段して活躍している。（「第二十二号」〈高下正義〉）

昭和四十七年二月二十二日付け文部大臣より財団法人として認可された全日本剣道連盟は、昭和五十年三月石田和外会長のもとで、「剣道の理念」「剣道修練の心得」を明文化して、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」と謳い、戦後の剣道のスポーツ宣言からの離脱を明らかにした。（「五十年史」全日本剣道連盟　平成十五年）

少年剣道教室

昭和五十年（一九七五）ごろから、剣道教室、剣道クラブ、剣道場、スポーツ少年団などで剣道を学ぶ小学生が増え、昭和六十年には県下で七九教室を数えた。

この頃、神山町には、神山少年剣道教室（高下正義・二三人）、神山錬成館（久保隆司・三十人）が、石井町には高浦少年剣道教室（大西正範・四十一人）、徳島右武館道場（重井好高・四十人）、久武館道場（久保勇・十五人）、石井剣道教室（美馬政雄・二十人）があり、将来を担う青少年の指導に情熱を注いだ。（注意⑱）

※注⑱

久保　勇　明治四十一年十一月二十八日～平成二年四月八日没　教士七段

石井町浦庄

昭和三年近衛第二連隊に入隊後、戸山学校に分遣され教育を受け初段を許される。在営中、剣道、銃剣道の稽古に励む。近衛兵の剣指導に来ていた久武館二代目久保義八郎の目にとまり、久保家の婿養子に迎えられ、三代目久武館館長となり、旧制麻植中学校の武道教授を務める。昭和十四年、再び近衛師団に出征し銃剣道教授としての教授として従軍。昭和十八年から柳生新影流第十一世を名乗る。

戦後、県剣道連盟審議員・相談役の要職の傍ら、久武館道場館長、石井中学校、高浦中学校の講師として後進の指導に当たる。（「第六号」〈名西支部〉「久武館道場ＨＰ」）

重井　好高　大正十年十二月一日～平成十九年十二月十九日没

教士七段　石井町

旧制麻植中学生の一～三年生時は石井隆介、四年生時の矢野修（武専卒）が途中で応召、後任には小浜重徳（富岡中と兼任）、五年生では横田武文の各剣道師範から指導を受ける。

昭和十六年出征、二十一年六月復員。昭和三十二年、陸上自衛隊に入隊、福知山駐屯地の連隊幕僚（人事兼副官）と併せて駐屯地部隊の剣道部長と

して剣道の指南を担当した。その折、京都府警の岳田政雄範士八段に師事して、五年間充実した稽古を積む。

二十一年有余勤務した自衛隊を退職、還暦を機に徳島右武館を創設し、文武不岐、左文右武をモットーにして、青少年の健全育成に尽力した。平成十四年度全日本剣道連盟剣道有功賞受賞。（「第十九号」〈重井好高〉）

美馬　政雄　大正十四年四月五日～平成十八年二月二十六日没

教士七段　石井町浦庄

幼少時、久保利雄に剣の手解きをうけ、麻植中では横田武文のもとで修行した。麻植中同期の高下正義と共に、名西支部、県剣道界を牽引した。石井剣道教室、高浦中学校剣道講師、支部稽古会に尽力。京都大会に連続三十三回出場。平成十五年度全日本剣道連盟剣道有功賞受賞。（「第二十号」〈美馬政雄〉）

高下　正義　大正十五年五月十九日～平成二十四年十一月十八日没　教士七段

昭和十四年旧制麻植中学校に入学、一年生から横田武文の指導の下剣道の稽古に励む。昭和二十七年阿北高校在任中に剣道が解禁され、運動場の片隅で剣道を再開。昭和三十四年徳農神山分校に転勤、四十年から部活の指導に尽力し、四十三年の県高校総体個人で男子が一位、女子が二位に入賞し、全国大会に導いた。

毎週金曜日は名西高校で名西支部の稽古、土曜日は須見吉富・石井隆介のもとで居合の稽古に励む。昭和四十九年神山少年剣道教室を開設し、昭和六十一年教職を退職後も十五年間指導に当たる。昭和四十八年から六十一年まで、全国教職員大会に選手及び監督として九回出場した。

学校剣道連盟理事長、県剣道連盟の監事、審議員、副会長などの要職を歴任。平成十七年度全日本剣道連盟剣道有功賞受賞。（「第二十二号〈高下正義〉」）

大西　正範　昭和二十年八月六日生まれ　錬士七段

昭和三十三年高浦中学校入学、顧問の高橋静夫より剣道の指導を受ける。昭和五十六年、高浦少年剣道教室を開設し、剣道の指導を通じて少年の健全育成に尽力した。町内の剣道教室を統合再編し「石井少年剣道クラブ」に改称。その後もクラブの代表指導者として献身的に少年の指導に当たるとともに、平成九年四月からは、名西支部の支部長として支部の稽古会を牽引した。

県下社会人剣道大会では、支部チームの大将として出場した平成十二年・十四年・十七年に三位、十五年は準優勝、十六年にはチームを優勝に導いた。（「第三十六号」〈近藤正章〉）

久保　隆司　昭和三十三年一月一日生まれ　神山町出身　教士七段

神山町下分中学校で多田三実より剣道の手解きを受け、徳島農学校神山分校に進学して高下正義に師事する。

昭和五十年四月から平成二十九年三月まで四国郵便局勤務。

美馬正雄、高井好高の指導を受ける。平成三年に観音寺玄武館道場に入門。

令和元年全国郵政武道大会ＯＢ個人の部で優勝。

昭和五十六年十一月より神山町下分で神山錬成会を主宰（平成十年休会）する一方、平成八年四月に徳島市国府町府中に徳島清風館道場を創設し、後進の指導に当たる。（「第十八号」〈久保隆司〉）

五　平成から令和へ

石井少年剣道クラブ

昭和五十四年、大西正範が一般社会人の稽古会を始めたのを機に少年の指導も始め、五十六年に「高浦少年剣道教室」の名で県剣道連盟に登録した。昭和五十八年頃には八十名を超えていた部員が、二名にまで落ち込んだ時期もあった。少子化に対応して町内の剣道教室を高浦少年剣道教室に再編統合して、「石井少年剣道クラブ」に改称した。平成二十五年（二〇一三）から近藤正章が代表指導者に就いている。令和元年時には小学生二十一名、クラブを卒業した中学生十二名が在籍しており、高浦中学校武道場で週二回の稽古に励んでいる。令和元年度全日本剣道連盟少年剣道教育奨励賞受賞。（「第三十六号」〈近藤正章〉）

中学校の剣道

平成二十四年度から適用された新学習指導要領・保健体育で「わが国固有の伝統文化である武道を推進する」ことをねらいとして、中学校第一学年及び第二学年において、武道教育が必修化された。徳島県下八十六中学校のうち、初年度には五十五校が剣道を選択し、神山東中学校を含む十四校に県剣道連盟から指導者を派遣している。（「第二十九号」〈三木毅〉）

平成十九年七月県中学校総体剣道競技で石井中学校・白木恒二郎が個人優勝、翌年一月第十八回県中学校剣道強化錬成大会（参加四十八校）で石井中学校男子が団体三位に入賞した。平成二十七年、全国中学校総体個人で石井中学校男子がベスト十六、二十八年はベスト八に進出して敢闘賞を受賞した。

平成二十八年二月、通算十八年にわたり石井中学校で剣道指導に当たってきた白木洋一の功績が高く評価され、徳島県体育協会から優秀指導員として表彰された。

社会人剣道

毎年十月に開催される徳島県社会人剣道大会に名西支部のチームを編成して出場して日頃の稽古の成果を発揮している。平成十六年三十三回大会には、先鋒・六條、次鋒・鋳形、中堅・白木、副将・久保、大将・大西の編成で優勝。平成二十七年四十四回大会には、先鋒・白木、次鋒・林、中堅・近藤、副将・白木、大将・久保が、決勝戦で徳島支部月曜会Aを制して優勝した。

個人では、令和三年三月長野県で開催された第六十八回全日本剣道選手権大会で、徳島県代表の白木恒二郎が、準々決勝に進出、ベスト八に輝いた。県勢としては平成二十八年の大石洋史に次ぐ快挙である。

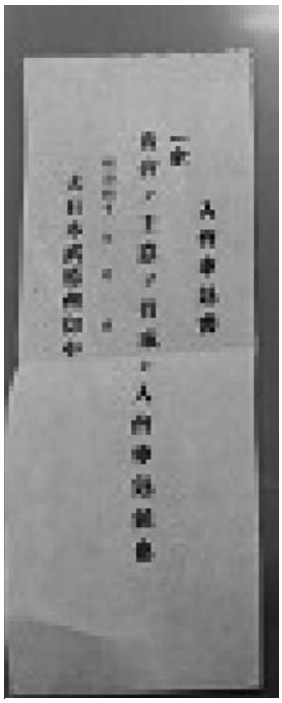
○おことわり

一　本稿は主に徳島県剣道連盟発行の「徳島の剣道」に掲載された記事を引用し、整理したものです。

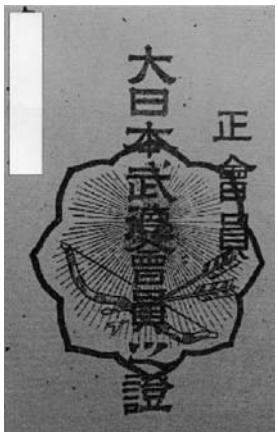
一　人名の敬称は、原則として省略しました。

一　本稿では元号を用い、適宜西暦年を（　）内に記しました。

一　引用史料・文献で刊行されている著書・編書には「　」を、



入会申込書



大日本会員之証

大日本武徳会徳島支部名西支所
（名西警察署）

著者には〈　〉を付し、文末に（　）書きで記しました。但し、徳島県剣道連盟発行の「徳島の剣道」については号数のみを記しました。

一　「徳島県剣道連盟」については「県剣道連盟」と省略して表記しました。

雄心館道場（久保隆司氏提供 2022.4.27撮影）

『徳島の剣道史〔1〕』

編集委員会

三木　毅
澤井勝之
別宮憲治
高島稔之
木原資裕

『徳島の剣道史〔1〕』

令和5年7月20日発行

編集・発行　徳島県剣道連盟

代表者　藤川和秋

〒770-0861　徳島市住吉三丁目9-6
栗本マンション106号室
TEL 088－652－2337
FAX 088－652－2360